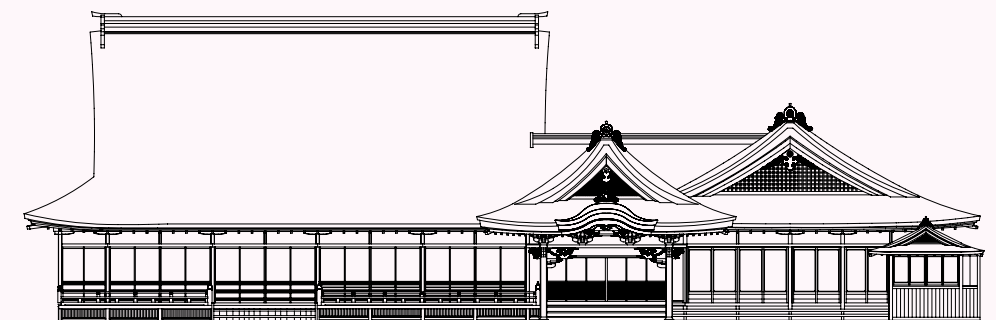




財団法人
和歌山県文化財センター 一年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2008





1 江戸時代の防潮・防波堤防 北から 県指定史跡水軒堤防



2 鎌倉・室町時代の瓦窯 南西から 北山廃寺・北山三嶋遺跡



1 縄文時代の 9001 大型竪穴建物 南東から 中飯降遺跡



2 縄文時代の 9100 大型竪穴建物 柱穴 北東から 中飯降遺跡



1 弥生・古墳時代の遺構群 北から 西飯降Ⅱ遺跡



2 弥生時代の溝 土器出土状況 北から 西飯降Ⅱ遺跡



1 重要文化財 天満神社本殿 竣工



2 重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所 修理前（客殿大広間の障壁画）

目次

平成 20(2008) 年度 受託事業一覧 …………… 2

平成 20(2008) 年度 受託事業所在地図 …………… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物整理

県指定史跡水軒堤防の発掘調査 ……………	4
県指定史跡水軒堤防の確認調査 ……………	6
特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理 ……	7
北山廃寺・北山三嶋遺跡の発掘調査 ……………	8
重行遺跡の発掘調査 ……………	10
中飯降遺跡・大谷遺跡の発掘調査 ……………	12
西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査 ……………	16
国史跡金剛峯寺境内 金剛三昧院の発掘調査 ……	20
藤並地区遺跡の発掘調査 ……………	22
田辺城下町遺跡の発掘調査 ……………	24
丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡の出土遺物整理 ……	28
野田地区遺跡の出土遺物整理 ……………	28

文化財建造物の保存修理・調査ほか

重要文化財 天満神社本殿ほか 1 棟の保存修理 ……………	29
重要文化財 旧中筋家住宅の保存修理 ……………	30
旧中筋家住宅未指定文化財等の保存修理 ……………	32
重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所ほか 1 基の保存修理 ……	34
重要伝統的建造物群保存地区 湯浅町における伝統的建造物の保存修理技術指導 ……	36
闘雞神社 文化財建造物の調査 ……………	37

関連研究・資料紹介

中飯降遺跡 縄文時代の大型竪穴建物 ……………	38
丁ノ町・妙寺遺跡の弥生土器 — 弥生時代中期最後の土器群 — ……………	40

金剛三昧院客殿「持仏の間」の変遷 ……………	44
機械縫い畳床の製作記録 ……………	46

普及活動

平成 20(2008) 年度の普及活動を振り返って ……	48
------------------------------	----

事業概要

平成 20(2008) 年度概要 ……………	52
------------------------	----

巻頭写真

巻頭写真 1-1 江戸時代の防潮・防波堤防 県指定史跡水軒堤防 2 鎌倉・室町時代の瓦窯 北山廃寺・北山三嶋遺跡	
巻頭写真 2-1 縄文時代の 9001 大型竪穴建物 中飯降遺跡 2 縄文時代の 9100 大型竪穴建物 柱穴 中飯降遺跡	

巻頭写真 3-1 弥生・古墳時代の遺構群 西飯降Ⅱ遺跡 2 弥生時代の溝 土器出土状況 西飯降Ⅱ遺跡	
巻頭写真 4-1 重要文化財 天満神社本殿 竣工 2 重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所 修理前 (客殿大広間の障壁画)	

例言

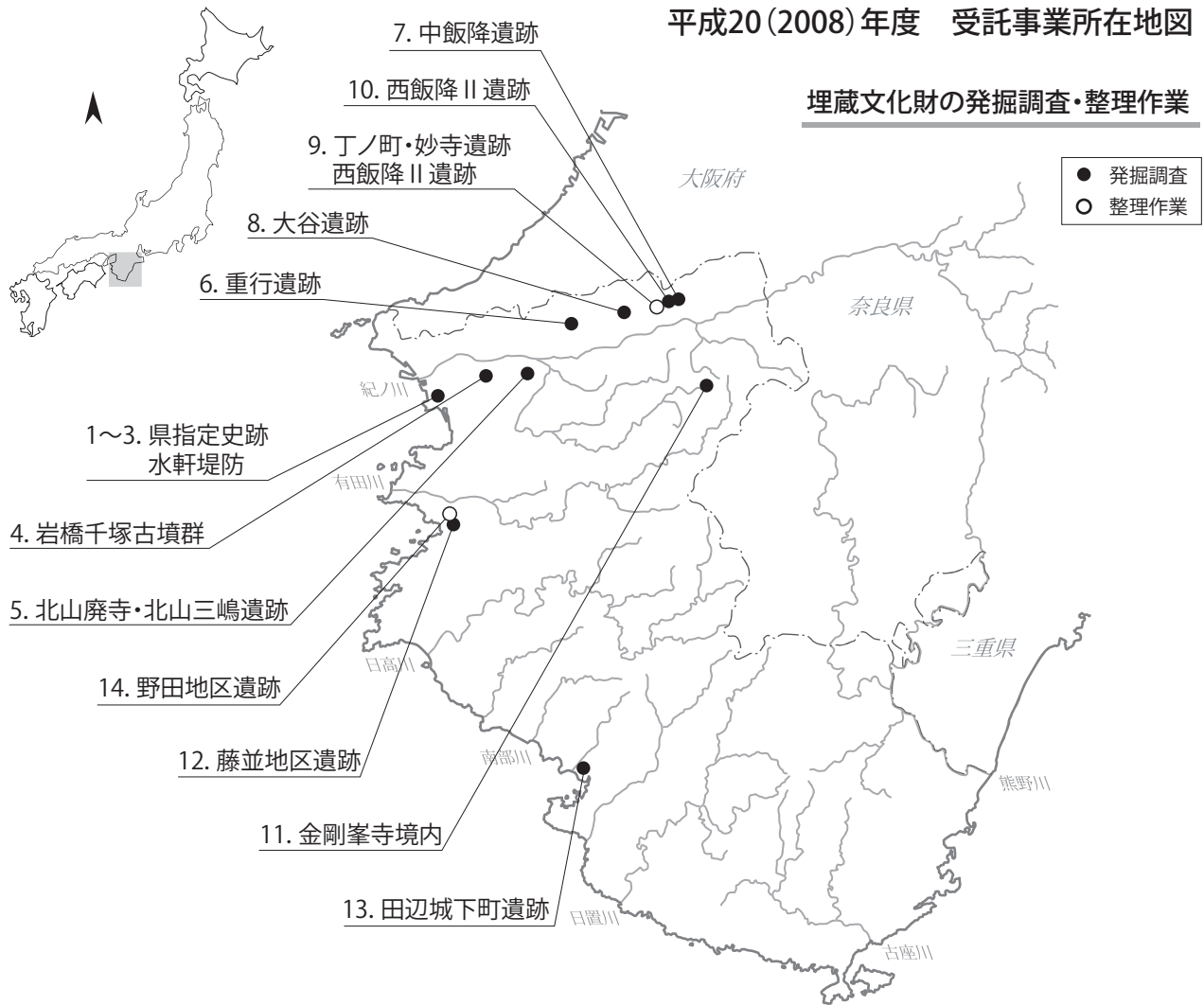
- 1 本書は、財団法人和歌山県文化財センターが平成 20 年度受託事業として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務、文化財建造物の保存修理設計監理業務ほか、および普及活動の成果をまとめたものである。
- 2 掲載した地図は、和歌山県教育委員会が発行する『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2004 ～ 2006 年度（地図は国土地理院発行の数値地図 25000 の複製）、および数値地図 25000 の複製を一部加筆し引用した。また、各自治体の発行する 1:2,500 都市計画基図を、一部加筆し引用した。
- 3 掲載写真・図面は、基本的に調査および整理中に撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。
- 4 掲載した座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）による。
- 5 執筆は職員が分担して行い、各文末に執筆者名を付した。編集および概要データ作成は、土井孝之・佐伯和也・下津健太郎が担当した。

平成 20(2008)年度 財団法人和歌山県文化財センター受託事業一覧

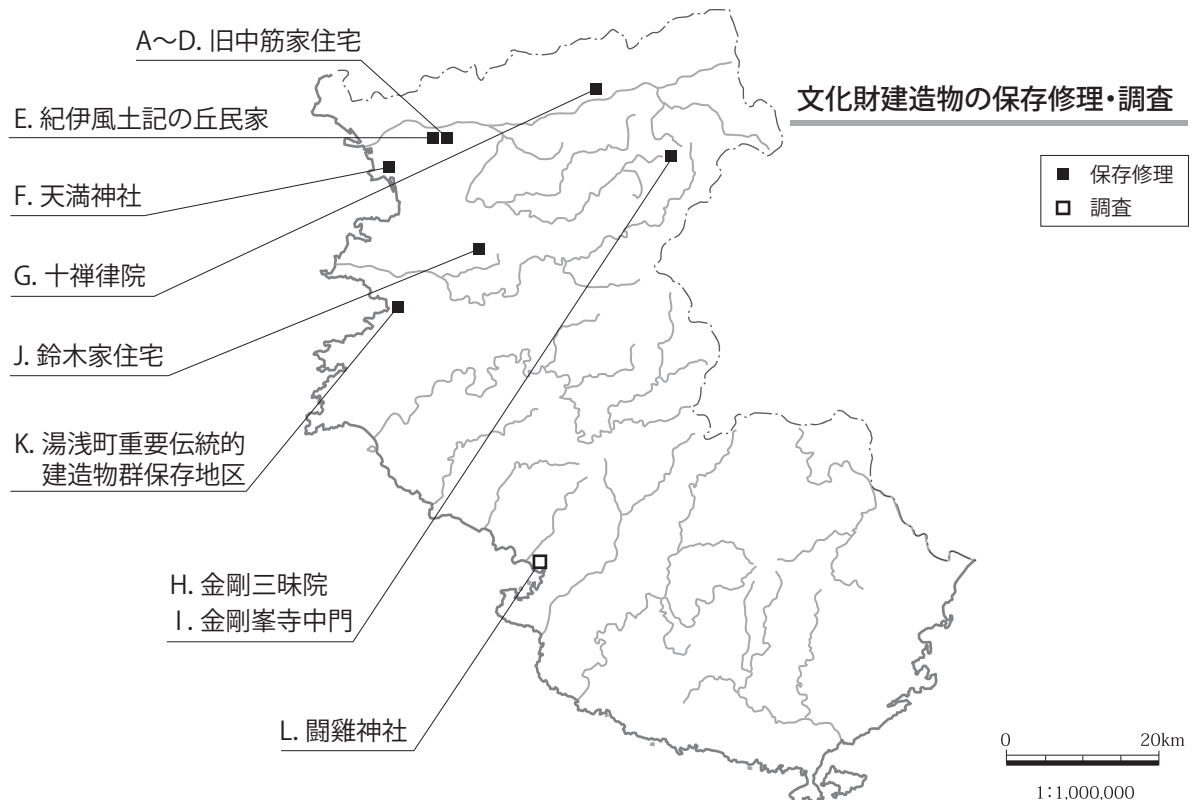
埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理業務					
	受 託 業 務 の 名 称	所在地	実施期間	調査面積	委託機関等
1	和歌山下津港 港湾改良発掘調査業務 (県指定史跡水軒堤防発掘調査)	和歌山市西浜	20.07.01 ～ 21.02.20	435㎡	和歌山県 (県土整備部)
2	和歌山下津港 港湾改良発掘調査外合併業務 (県指定史跡水軒堤防発掘調査)	和歌山市西浜	20.10.01 ～ 21.03.31	559㎡	和歌山県 (県土整備部)
3	平成 20 年度県指定史跡水軒堤防確認調査業務	和歌山市西浜	20.12.20 ～ 21.03.19	450㎡	和歌山県 (県教育庁)
4	平成 20 年度 発掘調査等支援業務 (特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・出土遺物整理)	和歌山市岩橋	20.06.18 ～ 21.03.10	38㎡	和歌山県 (県教育庁)
5	中山間総合整備事業(北山地区)に伴う北山廃寺・北山三嶋遺跡 発掘調査業務	紀の川市 貴志川町北山	20.10.25 ～ 21.03.31	7,493㎡	和歌山県 (那賀振興局)
6	一般国道 24 号 京奈和自動車道 遺跡(重行)発掘調査業務 (重行遺跡発掘調査)	紀の川市重行	20.09.18 ～ 21.03.31	4,070㎡	国土交通省 近畿地方整備局
7	一般国道 24 号 京奈和自動車道の改築事業に伴う遺跡発掘調査 及び遺物整理業務 (中飯降遺跡発掘調査) (大谷遺跡発掘調査) (丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡出土遺物等整理)	伊都郡 かつらぎ町中飯降	20.04.01 ～ 21.03.31	8,498㎡	国土交通省 近畿地方整備局
8		伊都郡 かつらぎ町大谷		562㎡	
9		伊都郡かつらぎ町 丁ノ町、妙寺、 西飯降		—	
10	一般国道 24 号 京奈和自動車道の改築事業に伴う遺跡発掘調査 業務(西飯降Ⅱ遺跡発掘調査)	伊都郡 かつらぎ町西飯降	20.08.05 ～ 21.03.31	6,615㎡	国土交通省 近畿地方整備局
11	重要文化財 金剛三昧院客殿ほか保存修理に伴う発掘調査業務 (国史跡金剛峯寺境内発掘調査)	伊都郡 高野町高野山	20.10.03 ～ 21.03.21	350㎡	財団法人 高野山文化財保存会
12	吉備金屋線道路改良調査(藤並地区遺跡発掘調査)業務	有田郡有田川町 天満・土生	20.04.01 ～ 21.03.02	2,237㎡	和歌山県 (有田振興局)
13	元町新庄線道路改良外合併調査(田辺城下町遺跡発掘調査)業務	田辺市 南新町・湊	20.04.01 ～ 20.12.26	1,587㎡	和歌山県 (西牟婁振興局)
14	高速自動車国道近畿自動車道松原智勝浦線建設事業に伴う埋 蔵文化財出土遺物等整理作業(野田地区遺跡出土遺物等整理)	有田郡有田川町 野田・天満	21.03.02 ～ 21.10.31	—	西日本 高速道路株式会社
文化財建造物の設計監理業務等					
	受 託 業 務 の 名 称	所 在 地	実施期間	棟 数	委託機関等
A	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理設計監理業務	和歌山市禰宜	20.04.01 ～ 21.03.31	6 棟	和歌山市
B	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理業務		20.04.01 ～ 21.03.31	6 棟	
C	未指定 旧中筋家住宅保存修理事業に係る未指定文化財 造作修理業務		20.06.02 ～ 20.12.31	1 棟	
D	未指定 旧中筋家住宅保存修理事業に係る未指定文化財 建造物等修理業務		20.11.04 ～ 21.03.31	3 棟他	
E	重要文化財 紀伊風土記の丘民家等修繕設計監理業務	和歌山市岩橋	20.07.05 ～ 21.02.28	1 棟	和歌山県 (県教育庁)
F	重要文化財 天満神社本殿ほか保存修理設計監理業務	和歌山市和歌浦	20.04.01 ～ 20.12.31	2 棟	宗教法人天満神社
G	県指定文化財 十禅律院本堂ほか保存修理設計監理業務	紀の川市粉河	20.10.01 ～ 21.03.31	3 棟	宗教法人十禅院
H	重要文化財 金剛三昧院客殿及び台所ほか 1 基保存修理設計 監理業務	伊都郡 高野町高野山	20.04.01 ～ 21.03.31	1 棟・1 基	財団法人 高野山文化財保存会
I	国史跡 高野山金剛峯寺伽藍中門復元実施計画業務	伊都郡 高野町高野山	20.12.19 ～ 21.03.31	1 棟	宗教法人 金剛峯寺
J	重要文化財 鈴木家住宅保存修理設計監理業務	有田川町中峯	20.12.01 ～ 21.03.31	1 棟	鈴木良子
K	重要伝統的建造物群保存地区 湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区保存修理技 術指導業務	有田郡湯浅町	20.07.01 ～ 21.03.31	—	湯浅町
L	未指定 闘雞神社文化財建造物調査業務	田辺市湊	20.09.17 ～ 20.11.30	—	和歌山県 (県教育庁)

平成20(2008)年度 受託事業所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・整理作業



文化財建造物の保存修理・調査



県指定史跡水軒堤防の発掘調査

遺跡の時代：江戸時代～明治

所在地：和歌山市西浜

調査の原因：和歌山下津港本港1号道路交差点改良工事

調査期間：2008.07～2009.03

調査コード：08-01・史19-1、08-01・史19-2

調査の経緯

県指定史跡水軒堤防は、和歌山市西浜に所在する江戸時代に築かれた防潮・防波堤防で、平成17年度に実施した道路拡幅工事に伴う発掘調査の結果、高い技術で築造された石堤と土堤で構成される堤防(中堤防)が検出された。その後、平成18年度から同20年度にかけて、和歌山県教育委員会により水軒堤防の範囲と内容を把握するための調査が実施され、南北端部の確認など数多くの成果が上がっている。

調査は、平成17年度調査地点の南隣を南北に2分割して実施した。南半の調査は終了したが、北半につ

いては平成21年度に引き続き実施予定である。

調査の成果

中堤防(石堤+土堤)を南北10m程度検出した。今回の調査で新たに土堤の全容と石堤の内部構造および多数の出土遺物を確認した。

土堤 石堤の東側(陸側)法面を覆い盛土がなされる。断面形は山形を呈し、石堤天端東端から東へ約7mの地点で頂点となり、東へ向かい標高を下げる。頂点は石堤天端より約1m高く、標高4.8～4.9mを測る。東西幅約13mを検出したが、土堤はさらに東へ続くものと考えられる。

土堤表層は緑泥片岩を含む山土で、頂点より西側は30cm前後の厚さで締め固められる。頂点より東側については山土が認められないこと等から、堤防築造時の形状を留めていないものと考えられる。

表層の山土以下は砂質土がベースとなるが、山土や小礫の存在及びその量で分層される。上位層は厚さ20～40cm程度の単位で概ね水平に盛土し、小礫や山土が目立つ。下位層は、調査区南壁では頂点よりやや東側で、北壁では頂点下位付近で盛り上がる砂層が堆積するが、上位と異なり小礫や山土はほとんど含まない。石堤を覆うことから人為的な盛土であることは間違いなが、下位層については、均質な山形の堆積であることから、堤防築造に際し自然堆積土を若干動かしたもので、築造前の堆積状況がある程度残している可能性が考えられる。

その他、石堤東法面と接して標高3m付近に10～20cm厚の山土が東西幅40～50cmで3～4層締め固められている。石積みを押さえるためのものとも考えられるが、その機能については検討を要する。



水軒堤防調査地点および周辺遺跡図 S=1:50,000



土堤断面全景 北から

遺物は各層から収納コンテナ7箱分近くが出土した。上位層からの出土が多い傾向にあるが、下位層からの出土も一定量認められる。18世紀中頃から後半を中心とする遺物が出土している。

石堤 これまでの調査で検出したものと構造的にはほぼ同じであり、高さ約4.0m、勾配は西法面が約40度弱、東法面が50度強、天端幅は約3.5mを測る。

今回の調査では、新たに基底部構造及び内部構造の一部が明らかになった。

基底部構造は、湧水のため部分的に確認した。西法面の基底石下端の標高は約0mで、やや大振りではあるが上位に比べ特に大きな石材は使われていない。緑泥片岩の細片を含む砂層がベースであり、大振りの礫や土台木は認められない。前面には緑泥片岩が配されるが、波浪により一部が流されたためか不規則で、平成18年度の確認調査で検出した南端部の石敷きのような整然としたものではない。

東法面の基底石下端の標高は約－20cmで、基底石に幅60cm以上の大振りの砂岩を用いる。基底石下及び前面には、大きいもので50cm大の緑泥片岩及び和泉砂岩の割石が敷き詰められる。また、基底石に接する位置に1本、基底石から東へ約1mの位置に2本の木杭を確認した。木杭の直径はいずれも10cm前後である。木杭より東に割石は確認できない。

内部構造については、工事に伴い堤防が削平される部分の石堤を移築するため、一部解体して確認した。このことにより、天端から約1.5m下までの石堤内部構造が判明した。

西法面の和泉砂岩は、城石垣を思わせるような奥行き長い石材が用いられる。内部は表面ほど細かい加工はなされておらず、矢穴痕が認められるものもある。



石堤東法面全景 東から

東西方向の断面形は長方形に近いが、わずかにクサビ形に加工され、石材間に小石を充填することにより角度を調整している。

天端の和泉砂岩は、奥行きが短く加工も雑で、互いの石材は表面でのみ接する。

東法面には西法面や天端に比べ粗い加工の和泉砂岩が中段と上段に用いられるが、若干様相が異なる。中段は、石積みの安定を得るためか、比較的大きな重量のある石材を用いているのに対し、上段の石材は、奥行きの短いクサビ形に加工され、安定の悪い構造となっている。

内部には緑泥片岩と和泉砂岩の割石が充填され、間に土や砂は介在しない。和泉砂岩が全体量に占める割合は低いが、天端と西法面近くに多く分布する。また、内部にも若干量認められる。

内部は、海側から流入した砂が礫間に入り込む状況であるため、内部出土遺物については慎重に取扱う必要があるが、混入の可能性が考え難いものに18世紀中頃から後半の遺物がある。

まとめ

今回の発掘調査で、土堤の全体構造、石堤の基底部及び内部構造などの新たな知見が得られた。過去の調査成果を合わせると、石堤と土堤で構成される今回検出の中堤防は、石堤の高さ約4m、土堤の高さ約5m、土堤を含めた基底部幅20m以上、全長約1kmに及ぶ大規模な堤防であることが判明した。

築造時期については、出土遺物等整理の結果を待たねばならないが、現状では出土遺物、矢穴痕形状及び石積み形態などから、18世紀後半に築造された可能性が高いものと考えられる。(佐々木宏治)



石堤断面 北から

県指定史跡水軒堤防の確認調査

遺跡の時代：江戸時代～明治・大正

所在地：和歌山市西浜

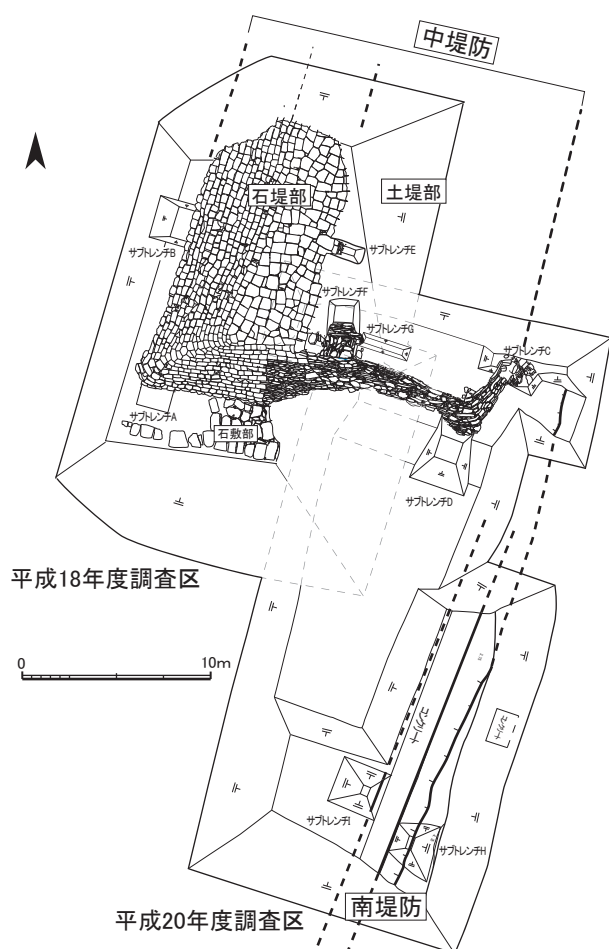
調査の原因：保存・活用

調査期間：2009.01～2009.02

調査コード：08-01・史19-3

調査の経緯

和歌山県教育委員会により、平成18年度から20年度にかけて、水軒堤防の全容解明と遺存状況の把握を行い今後の保存と活用の基礎資料を作成することを目的に、確認調査事業が実施された。当センターでは、この事業のうちの発掘調査部分を受託し実施した。



平成18・20年度遺構全体図 S=1:400

調査の成果

今年度は、石堤南端部以南の堤防の存在について確認するため、平成18年度の調査区南東部に一部重複して調査区を設定した。

調査の結果、土堤南東隅とこの東隣から南へ延びる近代の堤防（南堤防）を約30m検出した。南堤防は、前面をコンクリート、上部をシルト質の盛土で被覆する。南方への延長は不明だが北方は中堤防（石堤＋土堤）南端部付近で途切れる。出土遺物に加え、使用材料や古地図及び地元の聞き取り調査などから明治・大正年間に築造された堤防であることが判明した。

また、中堤防の基底部が東へ向かい標高を上げるなどから、18世紀後半に自然砂堆の前面あるいは一部重複した位置に中堤防が築造されたこと、その後明治・大正年間になって中堤防以南の自然砂堆を補強し南堤防を整備したことが明らかになった。

（佐々木宏治）

※詳細については、和歌山県教育委員会・財団法人和歌山県文化財センター『県指定史跡水軒堤防確認調査報告書』2009.03参照。

※掲載図面および写真は、和歌山県教育委員会提供。



土堤南東隅石積み 南東から



南堤防全景 南西から

特別史跡岩橋千塚古墳群の 発掘調査・出土遺物整理

遺跡の時代：古墳時代

所在地：和歌山市岩橋

調査の原因：史跡整備に伴う発掘調査等支援業務

調査期間：2008.06～2009.03

調査コード：—

調査の経緯

和歌山県立紀伊風土記の丘は、特別史跡岩橋千塚古墳群保存修理事業を実施している。当該事業を効率的に遂行するための支援業務として、当センターが発掘調査および遺物整理業務を受託している。平成20年度は、前山A地区での確認調査と大日山35号墳等の出土遺物の整理を行った。

発掘調査の成果

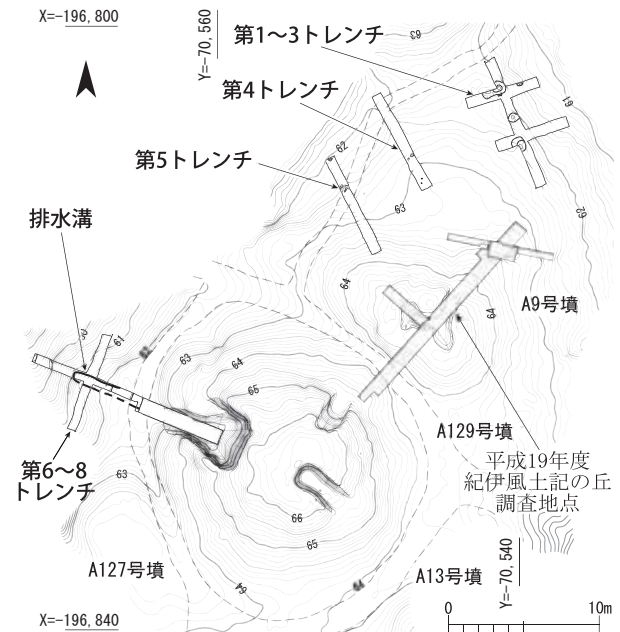
前山A9号墳周辺の古墳の可能性がある隆起、盗掘坑とみられる落ち込みを調査対象としたトレンチを5箇所（第1～第5トレンチ）、前山A13号墳入口およびその西側の隆起を対象としたトレンチを3箇所（第6～第8トレンチ）、合計8箇所のトレンチを設定した。発掘面積は38㎡である。

発掘調査の結果、前山A9号墳周辺に設置したトレンチでは、人工の盛土や地山の整形、主体部の痕跡など、古墳の存在を示す所見を得られなかった。

前山A13号墳入口付近を対象としたトレンチでは、墳裾と排水溝の端部を検出した。また、前山A13号墳の西側に位置する古墳状の隆起が盗掘排土によって



発掘調査位置図 S=1:5,000



調査区遺構図 1:500 ※

形成されていることを確認した。

排水溝は、遺構保護のため、平面の検出に留めたため、詳細な構造等は明らかでないが、幅0.7～1m、約10度の傾きを持ち、墳丘外に4m延びている。

遺物は、須恵器片があるが、元位置を保っていない。

整理の成果

大日山35号墳の東西造り出しから出土した形象埴輪の復元・実測を中心に整理作業を実施した。

このうち写真の人物埴輪は、平成15年に東側の造り出しから出土したもので、大きな体にどっしりとした太い足を据え、禪をしめ、片腕を上げていることから力士像と考えられるものである。胸とへその表現があり、写實的な力士像として評価できる。

残存高72.6cm、残存幅40cmで、頭部と腕先部を欠いている。東側の造り出しからは、素足と甲に突起のついた足の破片が出土しており、このいずれかと組み合わせるものと考えられる。

（村田 弘・岩井顕彦）人物埴輪



※掲載図面の一部(※印)と写真は、和歌山県教育委員会提供。

北山廃寺・北山三嶋遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生・奈良・鎌倉・室町時代
所在地：紀の川市貴志川町北山・三嶋
調査の原因：中山間総合整備事業（北山地区）
調査期間：2008.11～2009.03
調査コード：08-10・027、08-10・049

調査の経緯と遺跡の概要

本調査は、那賀振興局産業振興部農地課の計画した中山間総合整備事業（北山地区）に伴うものである。

北山廃寺は貴志川の支流、丸田川左岸の河岸段丘上に立地する古代寺院である。過去の調査により、奈良時代前期の「四天王寺式伽藍配置」の古代寺院跡と推定されている。しかし、これまでの調査は、対象面積が狭小なこともあり、不明な点が多い。また、北山三嶋遺跡は、一部が北山廃寺と重複しており、弥生時代から中世にかけての遺跡とされていた。

今回の発掘調査は、北山廃寺の外縁部にあたる部分を対象として実施された。調査面積は7,493㎡である。

調査区が広範囲におよぶため、5つの大地区に分割した。その後、調査区の追加・変更により、1区と5区については1-1・1-2区、5-1・5-2区の小地区に分割して実施した。

発掘調査の成果

調査の結果、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。また、元位置を保っていないが、ナイフ形石器も出土している。



調査位置図 S=1:25,000

弥生時代

竪穴建物を4棟検出した。出土土器から、弥生時代後期に帰属すると考えられる。検出状況からみて、当該期の遺構の大半は、古代の寺院造営や中世の耕地化などによる地形改変によって、削平・消滅したとみられる。

丘陵縁辺部に近い地点では、後世の地形改変の度合いが少ないことが判明しており、付近には、今回検出した竪穴建物以外にも、弥生時代の遺構が残存していると推定される。

古代

1-2区、2区で柱列群や柱穴を確認した。推定伽藍配置からみて、雑舎と関係があるものとみられる。

5-1区では、古代とみられる瓦窯と粘土採掘坑多数を検出した。

瓦窯は、大半が調査区外にあるため、詳細な構造や帰属時期等は明らかではないが、縄目叩きを施した瓦で補強した、ドーム状の天井部を持つ。1-1区でも熔着した古代瓦が出土しており、北山廃寺の位置する段丘の北側の谷（通称カワラダニ）には、瓦窯が複数存在するとみられる。

特筆すべき遺物としては、3区包含層から出土した、塔の部材（須恵質の相輪）がある。帰属時期は明らかでないが、類例からみて、奈良時代のものであろう。

また、5-1区を中心に、包含層中より、焼成失敗品とみられる須恵器が出土している。

中世

5-2区で瓦窯1基と、内側にロクロピットを有し、瓦製作工房とみられる掘立柱建物を検出した。また、5-1区では、粘土採掘坑が多数確認されている。

瓦窯は、焼成部のみ検出した。焼成部は、調査区外にあるものと推定される。焼成部は、平面が長方形で、2本の分炎栈道を持つ。内部からは、均整唐草文軒平瓦が出土している。窯の構造や、軒平瓦の文様、製作技法から、14世紀代の所産と推定される。

これら以外にも、古代、中世のいずれに帰属するか明らかではないが、5-1区や5-2区では羽口や鉄滓が出土している。

まとめ

今回の発掘調査は、対象範囲が北山廃寺の外縁部に

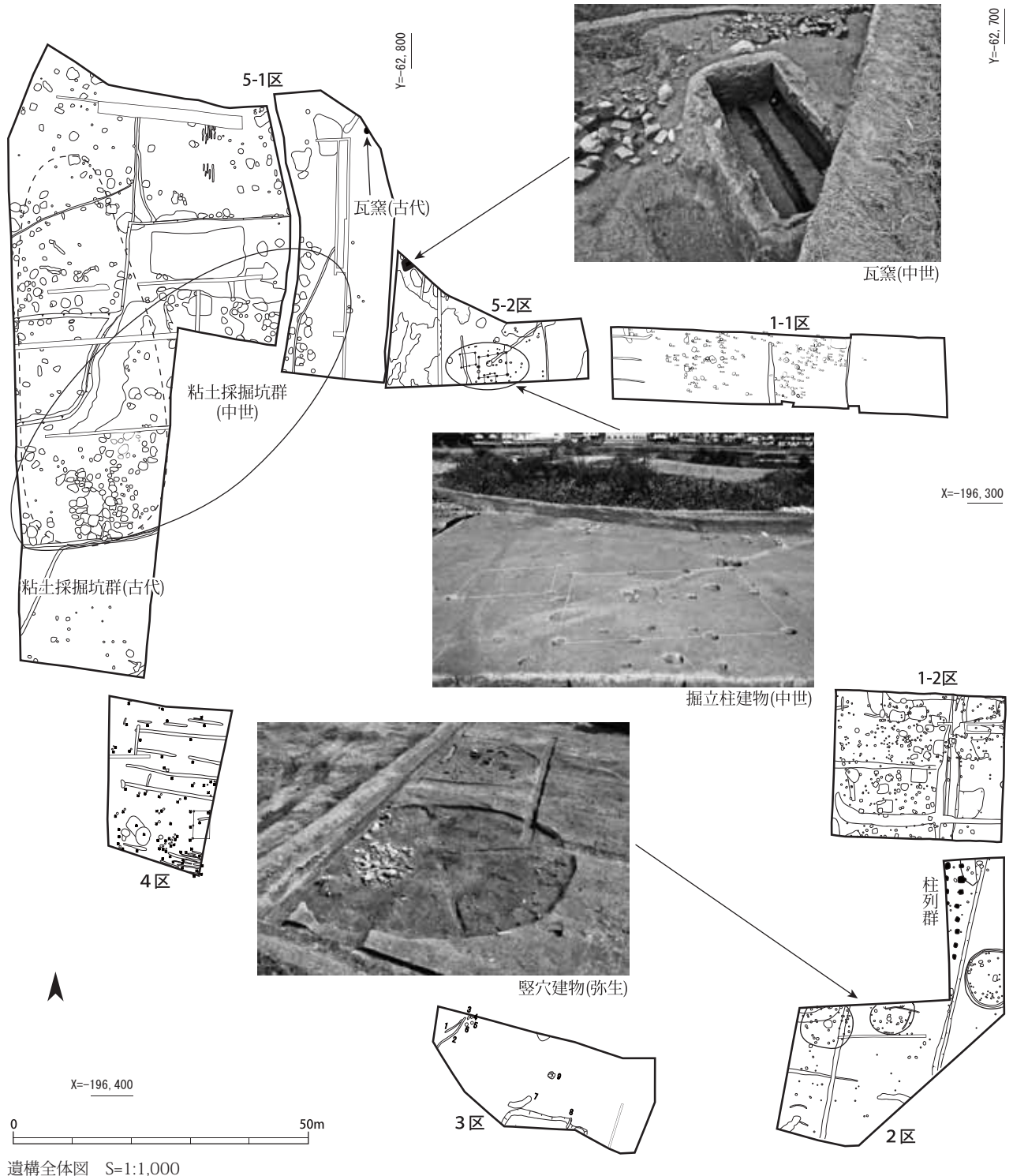
あたる部分であった。そのため、古代寺院に関連する遺構は、決して多くはない。

しかし、和歌山県内では初めて、粘土採掘坑、瓦製作工房そして瓦窯という中世における瓦生産の諸要素を空間的に把握することができた。また、弥生時代の集落跡を新規に確認したことや、古代とみられる瓦窯

跡や粘土採掘坑を検出することができた。

これらのことから、当遺跡が古代寺院としてはもちろんのこと、生産遺跡としても、歴史的に極めて重要な位置にあると言えよう。

(富加見泰彦・岩井顕彦・手島英実子)



重行遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生・鎌倉・室町時代

所在地：紀の川市重行

調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）建設

調査期間：2008.10～2009.03

調査コード：08-06・048

遺跡の概要

重行遺跡は、平成20年3月から7月にかけて県文化遺産課が分布調査および試掘確認調査を実施し、本調査が必要と判断された新規発見の遺跡である。

調査地は、広域農道橋本・岩出線と県道泉佐野・打田線の交差点南側に位置する。地形的には、和泉山脈から南流する佐川による開析谷の右岸に立地する。この遺跡の周辺には、西北西方向にあたる和泉山麓に磨製石斧の見つかった不動寺谷遺跡、石鏃や石錐が見つかった登尾遺跡などの縄文時代の遺跡、また、中世の城館跡として春日山城や城山城が周知されている。

調査地の現況は水田および雑種地であり、北から南へ雛壇状となり、標高は約104m～100mの範疇にある。調査区の呼称は、便宜上、地形の形状をもってA～D区とし、県道の東側をA区、西側を北からB区・C区・D区とした。但し、B区は段丘と谷に分かれるため、段丘をB-1区、谷をB-2区とした。

調査の成果

層位

調査地全体の基本層序は第1層から第5層まで認



調査区配置図 S=1:5,000

められ、第1・2層は現耕作土および床土、第3・4層は中世包含層、第5層は地山となる。遺構は中世包含層第3層除去後もしくは第4層除去後の地山上で検出した。

A区

A区は、佐川に落ち込む低位段丘の東端となる。遺構は第4層除去後検出した。検出した遺構には弥生時代の溝、鎌倉・室町時代の土坑や掘立柱列がある。第4層からの出土遺物に瓦器、土師器などの細片があるが、検出した土坑からは14世紀末～15世紀初頭と考えられる瓦質土器（甕・すり鉢）などが出土している。また、第4層からは和鏡破片や五三の桐紋を型押しした金銅製飾り金具も出土した。この地区は、谷の部分にあたることから弥生時代の遺構は元々稀薄であったと思われる、中世の時期（13～15世紀）には、生活域がおよんでいたと考えられる。

B区

B区は、段丘部分（B-1）と谷部分（B-2）に地形的に分かれる。B-1区では屋敷地を区画すると考えられる中世の石垣をこの地区の南端で、東西方向に約9m検出した。この石垣の石積みは1段ないし2段分が遺存しており、基底部の石は大きさ30～50cmの砂岩の自然石である。石垣の東側は、検出状況から現有の水路で壊されたものと考えられる。屋敷地に付随する遺構としては掘込地業、布掘り柱列、掘立柱、溝、土坑などを検出した。この掘込地業の中央の地山直上からは、地鎮と考えられる土師器の皿が伏せられた状態で1枚出土した。また、屋敷地の中央と考えられる石垣区画延長線内側から門脚跡と思われる柱穴を4穴検出した。この敷地の建物の本体であるが、柱穴は多数検出したが建物の柱並びを復元するには至らず、北側と東側の現有道路下にその存在が求められる。屋敷地の時期は出土した遺物からA区と同様に、14世紀末～15世紀初頭と考えられる。

B-2区は谷状地形の肩部に当たり、東側屋敷地の西限ラインとほぼ平行に落込み、南限で大きく西側に屈曲する。この谷状地形の堆積層からの出土遺物は面積の割に少量で、上層からは中国製青磁、土師器皿が出土し、最下層の一部分からは弥生時代中期の土器が投棄された状態で出土した。

C区

C区の北半部は現耕作土を除去すると地山となり、南東部分の一部に中世包含層が確認できた。旧地形は南西方向に下がっていたと思われ、現耕作土下からは中世の時期に改変されたと考えられる整地土が確認できた。

C区で検出できた遺構は、弥生時代中期の竪穴建物・土坑・溝、中世の石垣・溝・土坑などがある。竪穴建物は調査区東側中央で1棟検出したが、後世の削平を受け床面のみの検出に留まった。規模は、直径約8.5mを測る。また、壁溝が二重に巡ることから建替えられたと考えられ、南と東で重複する。柱穴は11基検出したが、柱間1.6～2.7mで考えれば、主柱穴は8本柱となる。中央には楕円形（長軸0.95m・短軸0.75m）の炉が掘り込まれ、周囲に地山掘り残しの炉堤の痕跡を残す。中世の遺構では南端で石垣を2m検出した。この石垣もB-1区で検出したものとはほぼ同方位を示し、中世以降の土地改変により壊されたと考えられる。他に時期は不明であるが細かい焼土と炭を充填した土坑を検出した。形状は隅円長方形で、長軸4.8m、短軸1.65mを測り、残存の深さは0.10～0.15mである。基底部および壁面は高熱をうけ赤化し、基底部には枝状の炭化物が貼付いていた。この遺構の性格は不明である。

D区

D区は、本調査で最も狭小な調査区である。検出した遺構は土坑7基である。遺物の出土していないものを除けば全て中世の時期である。

まとめ

以上、A区からD区までの遺構検出状況を記した。



C区 竪穴建物 北から

検出できた遺構の時期は、大きく分けて弥生時代中期と中世のものであった。今回の調査では縄文時代の遺構・遺物は確認できなかった。しかし、先にも記したとおり、周辺には不動寺谷遺跡や登尾遺跡などがあり、また、調査地より西に1.2～1.7kmの河岸段丘上の福琳寺遺跡や枇杷谷遺跡からは尖頭器や石鏃、縄文時代後期の深鉢が出土している。このように和泉山脈山麓の河岸段丘上には縄文時代早期から人々が住み着いた痕跡が確認されている。本調査地においても縄文時代の遺構が確認されて然るべきと考えられるが、後世の土地改変などで消滅した可能性が大きい。弥生時代の遺構は、C区で僅かながらも検出に至ったが、縄文時代の様相と同様と思われる、ほとんどの遺構が削平を受けているものと考えられる。古墳時代と古代の遺構・遺物は確認できなかったが、これらの時期が空白というのも考えがたく、次回の調査に期待したい。今回の調査で遺構、遺物の出土が顕著であったのは中世の時期であった。調査地一帯は、中世の時期には屋敷地が壇状に整形されていたものと考えられる。B区とC区の南限において東西方向の石垣の残骸を検出した。出土遺物は13～15世紀初頭のものが中心で、中でも14世紀末～15世紀初頭がこの屋敷地の存続時期と考えられる。調査地の西には根来寺の東限の砦と称される春日山城跡も存在することから、この地も中世根来寺の勢力下にあったことが十分考えられる。

来年度も本年度調査地の西側で調査が予定されている。谷筋の調査では、各時代の居住域からの投棄あるいは流出した遺物の出土、特に木製品の出土が予想される。段丘面においては、縄文時代や弥生時代の遺構の存在も期待される。

(佐伯和也)



B区 全景 南西から

中飯降遺跡・大谷遺跡の発掘調査

遺跡の時代：縄文～鎌倉時代、江戸時代

所在地：伊都郡かつらぎ町中飯降、大谷

調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）建設

調査期間：2008.04～2009.03

調査コード：08-13・014、08-13・015

調査概要

経緯 発掘調査は、京奈和自動車道（紀北東道路）の建設に伴い、平成18年度、平成19年度に丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡で実施した第1次調査、第2次調査に続く第3次調査である。調査地は、中飯降遺跡・西飯降Ⅱ遺跡・大谷遺跡の範囲内に位置する。中飯降遺跡については、調査区を9区に分けたうち、西端の5区と6区は西飯降Ⅱ遺跡の範囲内である。しかし地形条件や遺跡の内容は一連であるため、この報告では特に区別せず記述する。また大谷遺跡は、中飯降遺跡より約3.6km西方に位置し、遺跡の内容も全く異なるため、別に記述する。

環境 中飯降遺跡は、紀ノ川北岸の低位段丘上に形成された扇状地に立地する。調査地の北側には比高差約20mある崖がそびえ、その上部は中位段丘面となる。調査地は扇状地の扇頂を含み込む形で東西に長く設定され、3方向に下る緩やかな斜面上にある。現地地表が最も高い地点は2区の北東隅で、標高は約80.7mある。現地地表が最も低いのは5区の南西隅で、標高は約75.8mである。調査区内で約5mの高低差がある。扇頂より東方向への傾斜は、9区の南東隅部



調査位置図 S=1:50,000

分での標高が79.5mで、それより東は中谷川氾濫原につながる急峻な低位段丘崖となる。現況では果樹園や宅地の造成によって切り盛りされており、概ね旧地形の等高線に平行するコンクリート擁壁や石垣の段が連続する。

層序 現代表土および現代果樹園・現代宅地造成土の下は、以下の基本層序となる。

第1層、第2層、第3層はそれぞれ近代、近世、中世の水田耕作土および床土である。第4層はおもに有機質の腐食層であり、奈良時代・古墳時代・弥生～縄文時代の遺物を包含し、時代ごとに細分できる。第5層、第6層は、基盤層を構成する扇状地堆積の最上部にのる古土壌である。第7層は調査地南側の5区・6区で確認した低位段丘層、第8層は調査地北側の2区で確認した中位段丘層であり、人為的な遺物を含まない。遺構検出は、調査区ごとに層序の環境が異なるが、概ね第4層の各細分層の上面、第5層上面、第6層上面で行った。

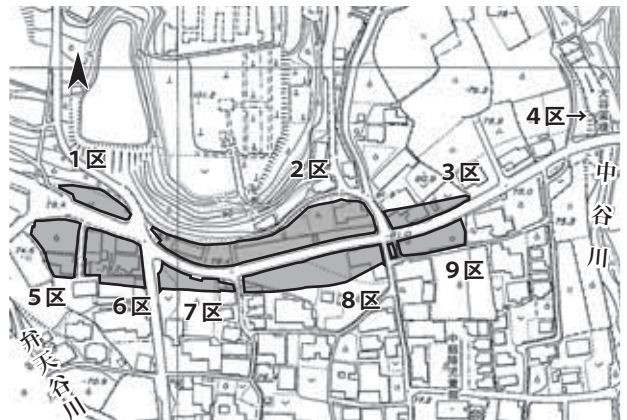
調査成果

1区 縄文時代と思われる小柱穴群、土坑、古墳時代以前の土坑、中世以降の耕作溝などを検出した。

2区 縄文時代、弥生時代～古代の遺構がある。

縄文時代後期では、調査区東方の2044 竪穴がある。径約6mの不定円形で、底面で柱穴を数個検出した。炉は検出していない。2048 掘立柱建物は、1間×2間の南北建物で、中央の柱2本が若干内側に配置される。これらは、9区で検出された大型竪穴建物に関連する遺構群の可能性が高い。

弥生時代中期では、2127 土坑がある。径約50cmの円形の土坑で、体部下半の欠落した壺を、口縁部を上



調査区配置図 S=1:5,000

にして埋置する。弥生時代後期では、2003 土坑があり、東西約 13m、南北 5m 以上の大型の土坑で、土器細片が少量出土した。

古墳時代前期～中期では、西方で検出した 2015 土坑がある。楕円形の土坑で、横臥状態の古式土師器甕が出土した。古代では、東方で検出した 2005 土坑がある。焼土で充填され、平坦面をもつ石で蓋をしたような状態を看取できる。須恵器杯身や甕の細片が出土した。

3 区 縄文時代と弥生時代の遺構を検出した。

縄文時代の遺構は、3061 竪穴建物と 3030 土坑がある。3061 竪穴建物は、縄文時代後期前半である。平面形は楕円形で、南北長約 4.5m、東西長約 4.0m ある。5 基の壁柱穴と、床面中央に地床炉 1 基を検出した。壁溝はない。下層は遺物が少ないが、上層からは多量の土器片が出土した。3030 土坑は、後述する 9 区の 9001 大型竪穴建物の北縁部分と考えられる浅い落ち込みである。近接して 2 基の埋設土器がある。

弥生時代の遺構は 3055 竪穴建物がある。円形の竪穴建物であるが、北半は調査区外、南半は現代水田の

石垣で攪乱されている。西半は検出面より深さ 5cm 程度しか残存せず、東半は削平されている。主柱穴も明確ではないが、北壁脇で被熱した面を検出しており、炉の可能性はある。床面上で弥生時代中期前半と思われる甕が出土した。

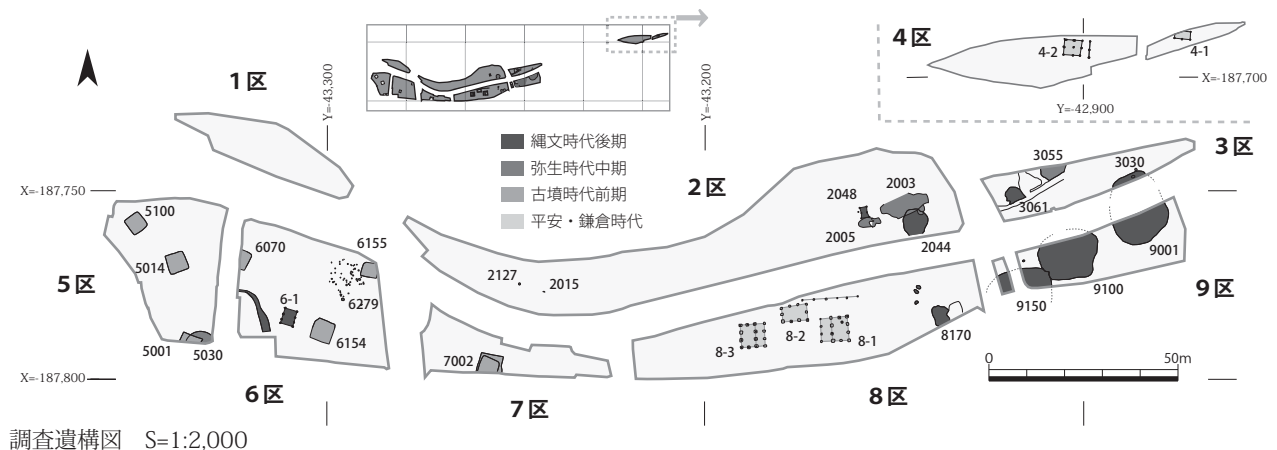
4 区 中世の掘立柱建物 2 棟、柱列がある。

直上層は、鎌倉～室町時代の遺物を含む。建物 4-2 は東西 2 間（約 4.5m）、南北 2 間（約 4.0m）の掘立柱建物で、中央に束柱の柱穴がある。東側に柵あるいは堀跡と思われる南北方向の柱列がある。建物 4-1 は、建物 4-2 の東約 25m に位置する。柱穴の規模、方向、柱間などが、建物 4-2 と共通する。

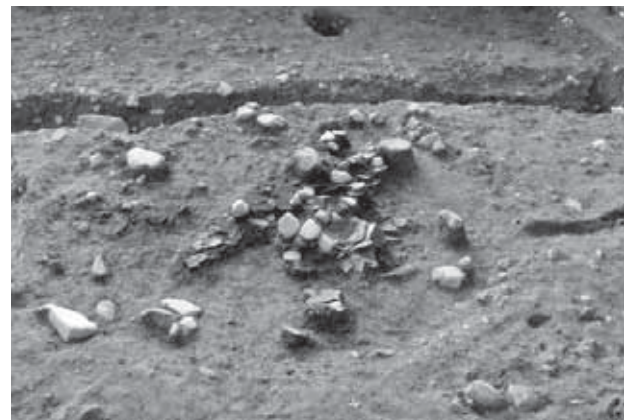
5 区 弥生時代と古墳時代の遺構を検出した。

弥生時代中期は、5030 竪穴建物がある。平面形は円形で、南半は調査区外に広がる。検出部分より直径は 8m 前後と推定する。壁溝が 2 条めぐり、建替えや修復が行われたことがわかる。

古墳時代前期は竪穴建物 3 棟がある。5100 竪穴は、一辺約 4.5m の方形の竪穴建物である。北西辺では 2 条の壁溝がある。壁の修復と考えられ、北西辺は当初



8 区 縄文時代後期の竪穴建物 南から



3 区 縄文時代後期の竪穴建物 北から

の約 4.5m から約 4.8m と広がっている。中央には土坑状の炉跡がある。南東壁際には、3 条の間仕切り溝で囲まれた区画内に深い土坑を設け、この部分のみ壁溝が途切れる。東北辺にも間仕切り溝があり、区画内には浅い土坑を設ける。なお、竪穴建物埋土から炭化材が出土しており、焼失したことを示す。5014 竪穴は、一辺 5.2m の方形の竪穴建物である。4 本の主柱穴、壁溝、中央炉を備え、南東隅には二基の土坑がある。また、主柱穴の外周が東側を除いて内側よりも一段高くなる。5001 竪穴は、方形の竪穴建物で、南半は調査区外である。北辺の長さは約 5.6m ある。壁溝は北東隅部分のみに残存する。5014 竪穴建物と同様に、外周部分が中央より一段高くなる。北東と北西隅で焼土塊と炭化物の集中部分がみられ、5100 竪穴建物と同様に焼失したことを示す。3 棟の竪穴建物は、共に埋土の中間に水成シルト層を挟み、同時期に埋没したことがわかる。

6 区 縄文時代と古墳時代の遺構がある。

縄文時代の可能性が高い建物 6-1 は、短辺 1 間、長辺 3 間の掘立柱建物で棟柱がない。約 17 度東偏する。いずれの柱穴も明確な柱痕跡が確認できた。出土遺物はないが、隣接する流路から縄文時代後期中頃～後半と思われる土器片が出土し、この建物の帰属時期を示唆する。調査区北東部には、直径 20cm、深さ 40～60cm の小柱穴が集中する。柱穴基底部に細い柱を杭状に打ち込んだものと考えられる。この柱穴が、直径 4m 程度の円形に分布する箇所があり、住居跡の可能性がある。近接する土坑からは、縄文時代後期中頃と思われる土器片がまとまって出土した。

古墳時代前期の竪穴建物 3 棟を検出した。6070 竪穴は、方形の竪穴建物であるが、調査区外に延びるため規模と構造は不明である。6154 竪穴は、方形の竪

穴建物である。南半が調査区外に延びる。東西幅は約 5.1m ある。東側の壁溝は 2 条確認できる。北壁際中央に、3 条の間仕切り溝で区画された長方形の空間に土坑を設けた遺構がある。5100 竪穴建物と同様の施設である。6155 竪穴は、方形と思われる竪穴建物である。西半のみを検出し、東半は調査区外にのびる。南北幅は約 4m である。

7 区 古墳時代前期の重複する竪穴建物 2 棟がある。

7002 竪穴は、東西約 5.8m の方形の竪穴建物で、南辺は調査区外である。壁溝はめぐるが、明確な主柱穴と炉を検出できていない。埋土から布留式期の土器が出土している。7002 竪穴建物の床面上で 7020 竪穴建物を確認した。7020 竪穴は、東西 4.9m、南北 4.5m 以上ある方形の竪穴建物である。主柱穴は 4 基あり、中央には土坑状の炉跡がある。

8 区 縄文時代、奈良時代の遺構がある。

縄文時代後期の竪穴建物、配石土坑、埋設土器、土坑、ピットなどを検出した。遺構は調査区全域に分布するが、東端部に集中する。8170 竪穴建物は、楕円形の平面形で長径約 4.5m、短径約 4.0m である。主柱穴は明瞭でないが、壁柱穴がめぐる。中央には地床炉がある。竪穴内の北端部には埋設土器がある。他に、調査区中央に埋設土器 1 基がある。配石土坑 3 基は、長径約 1.4m、短径約 1.1m の土坑で、埋土の上部に長さ 40～50cm の礫 10 数個を並べる。また、立石を伴う土坑などが数基ある。

奈良時代の掘立柱建物 3 棟と柱列 1 列を、調査区中央部で検出した。建物 8-1 は、2 間×3 間の南北棟の西面に庇が付く。身舎の柱間は、約 2.2m ある。庇長は 2.8m と長い。建物 8-2 は、2 間×3 間の東西棟で身舎の柱間は約 2.2m である。建物 8-3 は、2 間



5 区 弥生時代中期の竪穴建物 西から



2 区 弥生時代中期の土器棺 南西から

× 3 間の南北棟の東面に庇が付く。身舎の柱間は、約 2.0m である。庇長は約 2.4m と長い。なお建物 8-3 は、柱痕跡中に炭化材を含み、焼失したと思われる。3 棟の掘立柱建物は、庇のない建物 8-2 を中心にしてコの字形に並ぶ。いずれも約 5 度東偏する。以上により、3 棟が同時に存在したことは明らかである。しかし建物 8-3 は、他の 2 棟と柱間が異なるので、建築時期に違いがある可能性がある。

9 区 縄文時代後期前半の大型竪穴建物 2 基、大型竪穴建物の可能性がある大型竪穴 1 基、埋設土器、土坑、ピット、溝など多数の遺構を検出した。大型竪穴建物に関する遺構については、別項で詳述する。なお、9001 大型竪穴建物は、立体剥ぎ取り法によって移築保存された。9100・9150 大型竪穴建物については、地中に現状保存されることになった。

まとめ

縄文時代 6 区の第 4 層下層より、縄文時代中期の土器片が出土している。この時期に遡る遺構は確認していないが、周辺で縄文時代中期に最初の人間活動があったことが推定できる。2 区東端、3 区、9 区、8 区東端に集中する縄文時代遺構群は、縄文時代後期前半を中心とするものである。出土遺物は縄文時代後期初頭に遡るものが一定量存在し、中飯降遺跡の本格的な展開が縄文時代後期初頭にあることがわかる。大型竪穴建物が維持されたのはこれより少し下る縄文時代後期前葉であり、2 区で検出した竪穴建物は後期中葉に下る。以上により、縄文時代後期の前半期を通じて、集落が継続的に営まれ、ある時期に大型竪穴建物を必要とするような集落構造が存在したことが明らかになった。また、5 区と 6 区では縄文時代後期中葉か



5 区 古墳時代前期の竪穴建物 南東から

ら後葉にかけての遺物が出土している。

弥生時代 遺構としては、3 区と 5 区で中期の竪穴建物を検出し、2 区で土坑などを検出している。遺構分布は散漫である。西に隣接する西飯降Ⅱ遺跡では、10 数棟の竪穴建物が集中して検出されている。中飯降遺跡の弥生時代遺構群は、西飯降Ⅱ弥生集落の外縁に広がる機能空間に関連すると考えられる。

古墳時代 5 区と 6 区で布留式期の竪穴建物を 7 棟検出しており、短期間ではあるが、集落が営まれていたことが明らかになった。なお、弁天谷川対岸の西飯降Ⅱ遺跡でも同時期の竪穴建物が多く検出されており、この時期の集落が川の両岸に展開することが明らかになった。

奈良時代 8 区で検出した 3 棟の掘立柱建物は、計画的に配置されており、公的な施設である可能性がある。しかし、1 棟のみ柱間寸法が異なるなど、建築時期に差があるとも考えられる。また、全体に庇の柱が貧弱であること、中央の建物が庇を持たない点など、配置の計画性に比べて疑問点も多い。一般的な建物の可能性も含め、性格を検討する必要がある。

大谷遺跡の発掘調査

かつらぎ町大谷地内の独立丘陵上に所在し、調査地点はこの丘陵北東部の谷状地形に位置する。

調査地点は、果樹園以前は水田として利用されていた。当初南側に作られた水田は、北側の傾斜地を削り、南側へ盛土することにより拡張したことが明らかになった。また、水田嵩上げの盛土上に掘削された土坑は、近世以降に下るものであり、調査前に想定された中世の草田山城と関連する遺構でないことが確認された。

(富永里菜)



8 区 奈良時代の掘立柱建物 東から

西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：縄文～室町時代

所在地：伊都郡かつらぎ町西飯降

調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）建設

調査期間：2008.08～2009.03

調査コード：08-13・026

調査概要

西飯降Ⅱ遺跡は、紀ノ川北岸の低位段丘面に位置し、東側を弁天谷川、西側を畑谷池の谷筋に挟まれた微高地上の南向きの緩斜面に立地している。標高は、約70～80mを測る。遺跡の南には、妙寺条里と呼ばれる地割が顕著に残る地域が広がる。また、遺跡の南約100mには「大道上」「大道下」の字名が残り、紀ノ川と並行して東西に走る古代南海道の推定位置とされている。

調査範囲は、東西約300m、南北約60mである。調査地の南半と北側の一部は昨年度に調査を実施し、今年度は北半を3地区に分けて調査を行った。調査面積は6,615㎡（昨年度調査と合わせて計13,228㎡）である。遺物は、収納コンテナ（28ℓ入り）にして216箱分（合計417箱）が出土した。

調査区の基本層序は、上から現代果樹園造成土および近現代水田耕作層（第1層）、近現代水田床土（第2層）、中世水田層（第3層・第4層）、古墳時代～奈良時代の遺物包含層（第5層）となる。第5層以下には部分的に第6層（弥生時代の遺物包含層）が堆積するが顕著ではない。第5層及び第6層の下面は、無遺物層である基盤層（地山）となる。



調査位置図 S=1:50,000

調査成果

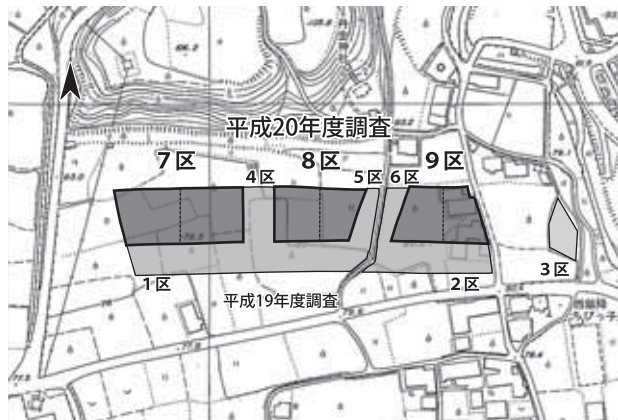
7区 調査地西端の7区西半は、他と比べ遺構・遺物とも希薄となる。中世の水田層以下に、出土遺物や層序から中世以前の水田の可能性のある層が堆積し、また、現地割から復元される妙寺条里の範囲に含まれることから、古代以降の土地改変の影響が考えられる。昨年度調査では、方形周溝墓の可能性のある溝1条が検出され、調査地西側一帯には弥生時代の墓域が広がると予想された。しかし、今回の調査では、後世の改変の影響もあり、明確な根拠は検出しえなかった。

調査区東半は、弥生時代～古代の遺構がある。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物1棟、溝1条（6200）、古墳時代の竪穴建物2棟、古代の掘立柱建物1棟である。6200は幅約3m、深さ0.5mの溝で、大量の弥生土器が出土した。

8区 昨年度調査で、遺構が最も密集していた部分の北側にあたり、調査区全域とも昨年度と同様の遺構密度である。調査区西半では、全域に竪穴建物が著しく密集し、南側で特に複数の掘立柱建物が重複する。検出した遺構は、弥生時代中期の竪穴建物2棟、土器棺1基、古墳時代から古代の竪穴建物20棟、掘立柱建物10棟である。

調査区東半も同様に各時代の遺構が密集するが、北東方向に向け遺構密度が低くなる。また掘立柱建物の数は少ない。検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物2棟、土器棺1基、古墳時代から古代の竪穴建物25棟、掘立柱建物1棟である。

9区 調査区西半では、中央を弥生時代の溝が南北に流下し、全域に古墳時代の竪穴建物があるが、遺構密度は高くはない。検出した遺構は、弥生時代の溝3条（5400・5430・5769）、円形土坑1基（5370）、古墳



調査区配置図 S=1:5,000

時代の竪穴建物 5 棟などである。5400 溝は幅約 4m、深さ約 1m で、礫による護岸が残り、大量の弥生土器が出土した。溝の底面には水溜め状の土坑 5370 がある。

調査区東半では遺構数は多くないが、大規模な溝があり、調査面積の 4 分の 1 ほどを占める。弥生～古墳時代の遺構・遺物はやや希薄となり、南東方向に向かって縄文時代の遺構が増加する。検出した遺構は、縄文時代の竪穴建物 1 棟、埋設土器 1 基、弥生時代の竪穴建物 1 棟、溝 2 条（6300・6400）、古墳時代の竪穴建物 3 棟である。6300 は、幅約 4m の溝で、6400 は幅 1m で断面形が V 字状である。出土遺物は少ない。

各時代の様相

縄文時代後期 調査地東端を中心に、縄文時代後期中葉の遺構が分布する。竪穴建物 1 棟（昨年度と合わせて計 2 棟）、埋設土器 1 基（合計 3 基）、土坑、小穴である。出土遺物は浅鉢、深鉢、注口土器であり、土器型式としては一乗寺 K 式、元住吉山 I 式に相当する。土器は、竪穴建物の炉付近からまとまって出土し、特に注口土器は、ほぼ完形に復元できる良好な資料で

ある。ほかに、石皿の可能性のある石器や、包含層中から凹基式の石鏃が出土している。また、包含層中には、縄文時代後期後葉の宮滝式が含まれるため、当該期の遺構が存在する可能性がある。

調査地の東方約 50m に位置する西飯降 I 遺跡では、表採資料として「成興野型」石棒 1 点が確認されている。今回の調査成果と合わせて捉えると、低位段丘上の弁天谷川一帯に縄文時代後期中葉～後葉の遺構が広がっていると推測できる。

また、調査地周辺を見わたすと、約 700m 西方の丁ノ町・妙寺遺跡では縄文時代後期初頭の遺構が検出され（平成 19 年度調査）、約 500m 東方の中飯降遺跡では後期前葉の遺構が検出されている（平成 20 年度調査）。段丘上のこの一帯が、縄文時代後期の一連の生活圏として認識できたことは、3 年次にわたる京奈和道関連の発掘調査の大きな成果となった。

弥生時代中期 調査地中央を中心に、弥生時代中期の遺構が分布する。検出した遺構は、竪穴建物 5 棟（うち 2 棟は建替え、昨年度調査と合計 17 棟）、土器棺 3 基、溝 6 条などである。



調査遺構図 S=1:1,600



9 区 縄文時代後期の土器出土状況 北東から



7 区 弥生時代中期の溝(6200)と土器棺 北東から

竪穴建物の分布は、7区 6200 溝から東で 9区 5400・6400・6300 溝から西の約 160m の範囲内にあり、その外側は遺構・遺物とも希薄となる。また 6200・5400 溝の遺物出土状況は、居住域側から落ち込んだ状況であるため、居住域の端を意識したと考えられる。

円形竪穴建物は、直径 10m 前後のやや大型の建物と、直径 7m 以下の小型の建物の二種に大別できるが、これが時期差あるいは組成に起因するのかは詳細な検討が必要である。前者は、総じて、竪穴の掘り込みが浅く遺物はあまり残存しない。また、中央に炉 2 基が並び、建替えを示すと思われる。床面には被熱痕跡が数箇所みられる。後者は、掘り込みが深く、比較的、残存状況が良いという傾向がある。

弥生時代中期から後期にかけて、円形竪穴建物以外の建物は現状では認識していないが、掘立柱建物や方形竪穴建物などが存在する可能性もある。

弥生時代後期になると、包含層や溝などから一定量の土器は出土しているが、今年度調査区内で認識できた遺構は多くはない。弥生時代中期と比較すると、概して遺構密度は低くなる。

周辺地形からみると、居住域の範囲としては、検出した東西幅とほぼ同程度に南北に広がると推測できる。生産域は、調査地より南西方向にあたる、畑谷池谷筋の扇状地を中心に展開すると想定している。また、既存調査では畑谷池谷筋より西側で、弥生時代中期～後期の方形周溝墓と竪穴建物が検出されている（平成 18 年度調査）。これらと一連の遺跡として捉え、集落構成・変遷を考えることで、弥生時代集落調査の好例となると思われる。

古墳時代前期 古墳時代前期の遺構は、おもに調査区の南東方向に広がる。方形竪穴建物 5 棟（昨年度調

査と合わせて計 25 棟）を検出したが、不明瞭で遺物が少ないものが多く、遺構の帰属時期についてはなお検討を要する。竪穴建物は一辺 4.5 ～ 5.0m で、中央に炉を設けるものがある。弁天谷川東岸の中飯降遺跡でも、当該期の竪穴建物が確認されており（平成 20 年度調査）、弁天谷川をはさんだ集落の広がりあるいは変遷が想定できる。

続く古墳時代前期後半から中期前半の遺構・遺物は、調査範囲のなかでは希薄となるため、集落が他所へ移動した可能性がある。

古墳時代中期～後期 古墳時代中期後半から後期にかけて、遺構は調査区の中央を中心に密集する。古墳時代後期から飛躍的に遺構密度が高くなり、飛鳥・奈良時代まで連続する。確認した竪穴建物は、47 棟（時期未検討も含めると 67 棟、昨年度調査と合わせて計 130 棟）である。竪穴建物と掘立柱建物は、その多くが古墳時代後期から飛鳥時代にかけて（6 ～ 7 世紀）の所産と思われるが、詳細な時期決定については遺物整理作業での成果を待ちたい。

竪穴建物は、一辺 4m ほどの規模が多いが、なかには一辺 7m のやや大型の住居がある。北側もしくは東側にカマドを備えるものが多い。このうち 8 区では、カマドの支脚や焚口に結晶片岩板石を用いるものが数例ある。対して、8 区の南に位置する昨年度調査区では、カマドの支脚に砂岩円礫を用いる例が多い。この相違点は竪穴建物群の組成や変遷を考えるうえで示唆的である。また、昨年度調査成果と同様に、カマド内や付近から製塩土器が出土する例が多い。この点は、塩の生産地である紀淡海峡沿岸から主な消費地である大和盆地へという塩の流通を考察すると、中継地点としての重要性が窺える。



8 区 弥生時代中期の竪穴建物 北西から



9 区 弥生時代中期の溝(5400)護岸の様子 南東から

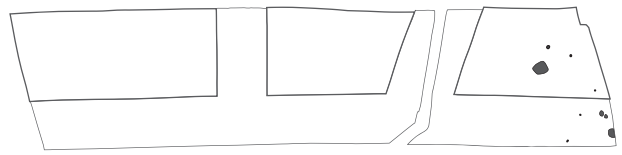
古墳時代中期～後期の竪穴建物の検出例は、紀ノ川下流域では少なくないが、上流域で当調査ほど遺構が密集して検出された例は東家遺跡（橋本市）において他になかった。古墳時代の遺跡が希薄であったかつらぎ町域において、これほど濃密な活動の痕跡が確認できたことは、大きな意義があるといえる。

飛鳥・奈良時代 調査区中央の東西約 100m の範囲に遺構が分布する。掘立柱建物を中心となるが、一部の竪穴建物が当該期に含まれる可能性がある。出土遺物では、円面硯 1 点（昨年度調査と合わせて計 2 点）が特筆できる。

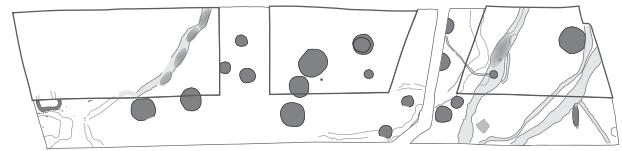
掘立柱建物は、12 棟（昨年度調査と合わせて計 25 棟）を確認した。建物の配置は、明確な規則性は見出し難いが、一部の建物については柱筋が揃う可能性がある。8 区南西隅から昨年度調査区にかけて約 20m 四方の範囲に特に密集し、重複する。遺構の重複関係などは検討を要するが、少なくとも 2～3 時期の変遷を想定できる。建物の規模は、2 間×2 間でほぼ方形のもの、2 間×3 間ないし 2 間×4 間で長方形を呈すものがある。長軸がほぼ座標北に平行あるいは直行するものが多いが、やや西偏するものもある。このほか昨年度調査区では、掘立柱建物群の南西に井戸 1 基がある。井戸は、厚さ 7～8cm、長さ 4m の側板を円形に設置する堅牢な構造である。

建物の数や配置、井戸や硯の存在などから、官衙的な性格を帯びる可能性を想定しているが、遺構の性格や構成、変遷についてはなお検討を要する。いずれにしても、調査地より南西側へ展開すると予想される生産域の開発における拠点という認識は、過大評価ではないであろう。（富永里菜）

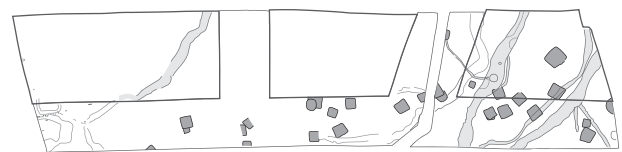
縄文時代後期



弥生時代中期



古墳時代前期



古墳時代中期～後期



古代～中世



遺構変遷図 S=1:3,000



8 区 古墳時代中期の竪穴建物 南東から



8 区 飛鳥時代の竪穴建物のカマド 西から

国史跡金剛峯寺境内 金剛三昧院の発掘調査

遺構の時代：室町～江戸時代
所在地：伊都郡高野町高野山
調査の原因：金剛三昧院客殿ほか保存修理
調査期間：2008.10～2008.12
調査コード：08-16・史03

調査の概要

高野山に所在する重要文化財金剛三昧院客殿ほかの保存修理に伴い、建物床下の発掘調査を平成20年10月6日から12月1日まで行った。調査は、幅30cmのトレンチを建物の保存修理工事に支障のない場所に設定し（客殿は6箇所、台所は4箇所）、地盤を慎重に削平し、叩き締められた地面の観察と地盤の掘削箇所と土盛りの範囲を探ると共に礎石の据付状況の確認を行った。この発掘調査に先立ち、平成19年度に行った金剛三昧院境内のボーリング調査により、敷地全体は盛土整地されており、旧地形は西側の客殿は高く、東側の台所付近は谷状に低いことが明らかにされている。

客殿

床下の地面は、時期の異なる叩き締めた土面が重複し数面あること、現建物以前の建物の礎石抜取穴があることにより、現金剛三昧院の位置にA期～D期の4時期にわたり建物が建て替えられていたことが判明した。

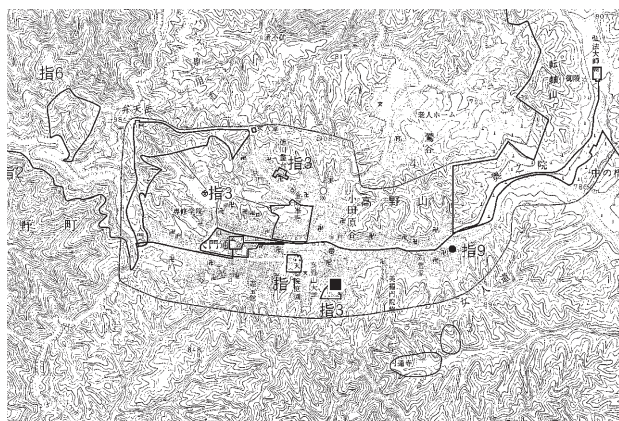
A期 建物造成にあたり、敷地の北西側の山裾を岩

盤まで削平し、南東部のやや低い部分に盛土整地し、平坦面になっているが、北東部は窪みとなっていた。現大広間の南側柱の南東側に接して、礎石抜取穴（直径約50cm）が整然と並ぶ東西棟建物跡を検出した。その規模は梁間3間（2m等間）、桁行5間（2m等間）であり、地面が土間のように固く叩き締められていた。この建物の基礎整地土から15世紀前半の土師器皿と宋銭が2点一緒に出土しており、これは地鎮法具と考えられる。

B期 A期の敷地をさらに北側に盛土拡大し、西に南北溝及び北に東西溝を掘りその区画とし、北東隅には池状の施設が造られた。そしてA期の建物の北側で、柱筋が通る礎石抜取穴を検出し、北側に建物が増築されたこと、その平面形が凸字形であることを確認した。この拡張部の建物規模は、梁間2間（2m等間）、桁行3間（2m等間）である。

C期 B期の建物をさらに北側に一回り大きく拡張するため、建物北側を盛土整地しており、再建した建物の規模・間取りは、現客殿とほぼ同じで、東西16m、南北間15mである。この建物の南側柱位置は、A期建物の南側柱位置より約20cm北・西に寄っている。また、北東隅の池を埋め立てており、新たに西側に泉池が造られたものと推測される。

D期 C期と同規模・同配置で建てられた現客殿で、17世紀前半に建てられたものと考えられている。建物床下は表面全体が赤色土で整地され、その上を白色物で塗布していた。建物の中央部に位置する持仏の間で、隅円方形の土坑（東西1.2m、南北1.0m、深さ約0.58m）を検出した。この土坑の表面から中国からの輸入銭（宋銭）が19枚出土し、またこの土坑の上面から30cm下の中央に手の掌大の扁平な石があり、



調査位置図 S=1:50,000



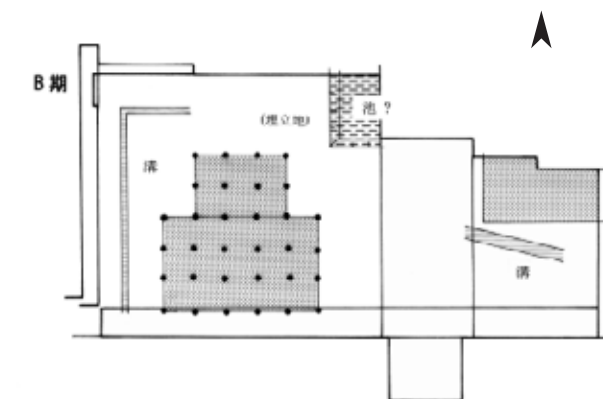
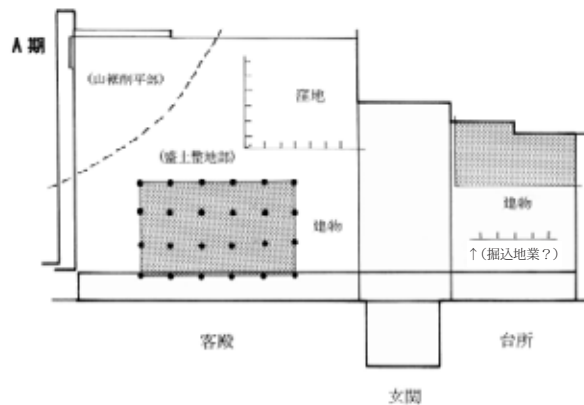
客殿A期の建物跡 西から

その直下から小型五輪塔の地輪部分を縦半分に分った方形の石の上に据えられた賢瓶（高さ 12cm）を検出した。賢瓶は青銅製で、鉄製の円形の蓋をしており、錆で付着している布・紐の残欠より、賢瓶は絹布で包まれ、四方を五色の紐で十文字に縛っていたことが明らかになった。この賢瓶の周りには、土師器小皿（直径 7.0cm ～ 7.8cm、器高 1.8cm ～ 2.0cm）が 5 枚一組にして東西北に各 1、南に 2 の合計 5 組配置されていた。この土師器皿は 17 世紀前半に所属するものと推測される。これらは建物の建設に先立って行われた地鎮祭の法具とみられる。賢瓶の納入品については、未だ蓋をあけて調査していないが、同様の地鎮の賢瓶が高野山大門基壇中央部で見つかっており、瓶の中には儀軌にみえる五宝・五葉・五香・五穀が納められていたものと考えられる。

土室 土室の間の床下には不要な礎石が残存しており、その上の天井痕跡からみてこれが土室の礎石であり、土室は数回造り替えられたことが判明した。

台所

玄関の東側にある台所の南半部の建物床下地面の調査を行い、応接の南側柱筋より北 2.2m で掘込地業を



前身建物の変遷(A 期・B 期) S=1:500

検出した。この掘込地業土を掘り込む斜行東西溝は、応接の南側柱筋より北 3.1m で、幅約 1.1m、深さ約 0.5m であり、その北岸上に塩ビ製の排水管（直径 30cm）が埋設されている。この北側には、固く叩き締められた地面があり、ここに規模は不明であるが、建物が立てられていたものと思われる。この掘込地業は、創建当初の地形と推測される。そのため、この固く叩き締められている地面の時期については、客殿 A 期と同時期と思われる。この固く叩き締められた地面で 2 箇所に大きな土坑が検出され、その上に暗褐色土が堆積していたことから、この叩き面に建てられた建物が廃絶した後に、この位置には建物が建っていなかったと思われる。南側の床下地面の上面には、客殿 D 期と同じく、赤褐色整地土の上に白色物が塗布されており、台所も客殿と同時期に建てられたことが分かる。

まとめ

各建物の建立年代は確定できないが、現在、A 期を 15 世紀前半、B 期を 15 世紀後半、C 期を 16 世紀後半、D 期を 17 世紀前半と推定している。（菅原正明）



客殿床下土面の重複状況 南西から



地鎮土坑 東から

藤並地区遺跡の発掘調査

遺跡の時代：旧石器・鎌倉～江戸時代
所在地：有田郡有田川町天満・土生
調査の原因：県道吉備金屋線道路改良事業
調査期間：2008.05～2008.07、2008.10～2008.12
調査コード：08-21・032

遺跡の概要

藤並地区遺跡（32）は、有田郡有田川町（旧吉備町）天満・土生・明王寺・水尻の広い範囲に所在し、有田川河口部から上流に約10km遡った左岸に位置する。藤並地区遺跡が所在する有田川下流域は、旧石器時代の遺跡を皮切りに遺跡の分布が比較的密に認められる地域である。付近には有田川の形成による沖積平野と河成段丘が発達し、この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在する。

調査地は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区）ないしは北東端（Ⅲ・Ⅶ区）に該当し、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東西両側に位置する。

調査の概要

調査地は、大きく7箇所に分かれ、地点の違いによりⅠ～Ⅶ区と呼称して調査を行っている。調査は、7地区合計2,237㎡（調査対象面積3,138㎡）について実施した。

調査では、掘削排土の仮置場が十分確保できないⅠ・Ⅱ・Ⅵ区は各々東側半分と西側半分に分割する反転方



調査位置図 S=1:25,000

式で調査を行った。これに伴い、Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区では航空写真撮影も分割して作業を行っている。なお、Ⅳ～Ⅶ区は、県文化遺産課・県建設部から追加変更の依頼のあった地区である。

検出遺構 Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区の遺構は、主に中世遺物包含層（第3層・第4層）上面と旧石器時代以降の形成層の直上（第3層・第4層下面）で確認できた。

調査区の内、Ⅲ区・Ⅶ区は、昭和30年代の大規模な粘土採掘に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、粘土採掘坑に充填されていた。

遺構の主だったものとして、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを、Ⅱ区では奈良時代の掘立柱建物、鎌倉・室町時代の土坑・落ち込み状遺構・水田耕作に伴う不整形な小溝群・土坑などを、Ⅲ・Ⅶ区では上位面の調査で褐灰色シルトを埋土とする土坑・落ち込み状遺構などを検出した。

特筆すべき事項として、Ⅶ区下位面として行った調査において既往の調査では確認されていなかった旧石器時代の堆積層（粗砂細礫層）や往時の自然面と石器・石器剥片類、更に下位の基盤層（所謂、地山）を確定できたことにある。

Ⅵ区 1 溝 第3層下面で、東西に走行する1溝を検出した。溝は、Ⅵ区中央から南側に位置する。

溝は、基本的に東西に走行するが、西側では南西方向に浅い落ちの広がり認められ、最大幅員1.35m・深さ0.90m・延長6.5m分を検出した。埋土は、自然堆積と考えられ、上端部は第3層の形成によって削平・整形された状態にある。埋土の中位以下に層厚約40cmの木屑（木端・木の葉）層を形成するが、流水による影響がおよんだためか、肩崩れを起こし遺構掘削地



Ⅵ区 1 溝 西南西から

盤類似土が木屑層の上に覆い被さる。

1 溝からの遺物は出土していない。1 溝は、包含層第 3 層（室町時代）によって埋土の上端部が削平されること、第 4 層系の堆積層（鎌倉時代）が存在しないことから両層の形成の過渡期に掘削されたとも考えられる。

Ⅱ区 掘立柱建物 1 掘立柱建物 1 は、Ⅱ区の北西隅に位置し、南北桁行 3 間（東側柱並び 6.60m）×東西梁間 2 間（北側柱並び 4.65m）の南北棟の側柱建物である。掘形は、方形・長方形・歪な方形を呈し、一边 0.54～0.77m を測る。柱当りに該当する埋土部分は、円形を呈し、径 0.13～0.31m、深さ 0.26～0.46m である。

掘立柱建物 1 は、棟方向が東側柱並びで N-5°-E、西側柱並びで N-8°-E である。埋土は、掘形は人為的埋土、柱当りは人為的埋土と自然埋没、そしてその両方を合わせ持つ三過程が認められる。中には埋土に炭粒を多量に含み、焼成粘土塊を包含する柱穴も存在する。

遺物は、掘形埋土から奈良時代の須恵器甕・土師器皿の小破片が数点出土したに止まる。掘立柱建物 1 は、出土遺物からの時期確定は今後の課題である。

Ⅶ区下位面 自然流路状の落ち込み 調査地の大半は、粗砂細礫層を埋土とする大小の落ち込みによって形成され、全体の中で、大きく広い範囲で高低差を形成している。落ち込みの走行は、主に南東から北西を指向する。

粗砂細礫層は、調査区壁面の断面土層観察では一時に堆積したのではなく、複数回による堆積と見なされる状況にある。粗砂細礫層の堆積は、調査区全域におよぶものであり、層厚 0.16～0.84m を測る。



Ⅱ区 掘立柱建物 1 東から

旧石器時代の遺物の抽出を目的とした粗砂細礫層の採取は、4m 方眼を基本にした。粗砂細礫層の採取に当たっては、極力、落ち込み内の粗砂細礫層の採取をも行ったが、現時点の資料では石器・石器剥片が特に多くなる傾向はなかった。

出土遺物 出土遺物の大半は、主に各地区の包含層やⅢ区の粘土採掘坑の改変土から出土した鎌倉・室町時代の土器類で占められる。鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・甕・土釜）、瓦器（小壺・甕・椀・皿）、須恵器、瓦、砂岩製砥石、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁・白磁・染付）、銭貨・鉄鏃などがある。

その他、旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器・石器剥片、縄文時代の石鏃、弥生時代の土器（甕）、奈良時代の須恵器（壺・甕・坏・坏蓋）・瓦などがある。鎌倉時代の遺物に混じって、硬質頁岩製石器剥片が出土している。

まとめ

今次の調査で、当該範囲の県道改良事業に係る和歌山県土木部から依頼、県文化遺産課から指導のあった地区の調査を完了することになる。

下位面の調査による粗砂細礫層からは、旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器・石器剥片が多数出土している。今回の調査地周辺には、これまでの発掘調査で土生池遺跡（25）や藤並地区遺跡の南端や西端からナイフ形石器や搔器・削器などが多数発見されている。このことに関連して旧石器時代の生活の広がりが当該調査地周辺部まで広範におよんでいたことが確実となった。

また、下部基盤層の確認も、確定できたことは大きな成果であったと言える。（土井孝之）



Ⅶ区 下位面全景 東北東から

田辺城下町遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生・平安～江戸時代

所在地：田辺市南新町・湊

調査の原因：元町新庄線外1線道路改良事業

調査期間：2008.06～2008.12

調査コード：08-35・104

調査の経緯

田辺は、紀州徳川家の付家老である安藤氏の城下町で、家臣の屋敷地と町屋の一部を範囲として田辺城下町遺跡が周知の遺跡となっている。遺跡は、田辺湾に面して会津川河口左岸に形成された海岸砂丘上に立地し、付近の標高は約5mを測る。遺跡内には弥生土器・須恵器・古銭の出土があり、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかになっている。

遺跡の範囲内で、元町新庄線外1線道路改良事業に伴い田辺市南新町一湊間の海蔵寺通りが改良されることになり、工事に先立ち、平成18年度に県文化遺産課が工事立会をおこなった。その結果、近世と中世以前の遺構面があること、それぞれの面に遺構が存在することが確認され、本調査が実施されることになった。

平成19年度は、工事区域の一部である面積330㎡を対象に、当センターが6月から7月にかけて発掘調査を実施し、弥生時代の土壌墓や中世の掘立柱建物・溝、近世の建物状遺構・土坑などを検出するとともに、江戸時代の後半頃を中心とする土器類が多く出土した。



調査位置図 S=1:25,000

平成20年度の発掘調査は、面積1,587㎡を対象に、現地調査を6月から12月にかけて実施した。

調査区と基本層序

調査区は西側から①区、②区、③区と3つの区に分け、このうち③区は調査の工程上、③区-1と③区-2に分けている。

基本層序は、第1層～第4層に区分している。第1層は表土・現代の造成土、第2層が近世の整地土層、第3層が中世の遺物包含層、第4層が地山である。遺跡が砂丘上に立地することから、各層は砂が主体であり、上位の層の方が土分を含む割合が多く、下位ほど土分が少なく、第4層では土分をほとんど含まない。

第2層は、西端の①区にはなく東に向かって厚く、大きくは上・下2層（第2-1層、第2-2層）に分けることが可能である。屋敷を造成する段階で行われた整地土層と判断することができ、第2-1層上面が第1遺構面、第2-2層上面が第2遺構面で、ともに江戸時代後半以降の面となっている。

第3層は、昨年度の調査で確認したもので、今回の調査では確認されていないが、近接地の一連の調査であることから層位を考える上で基本層序としている。この層の上面で、昨年度は江戸時代の遺構を検出している。

第4層は、遺物を含まない自然堆積層で、上面が第3遺構面となり、中世以前の面となっている。第4層上面のレベルは東に向かって低くなっており、これは地形が砂丘ピークから後背地に向かうことに起因するものと考えられる。



調査区配置図 S=1:5,000

検出遺構

発掘調査で見つかった遺構には、弥生時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代のものがある。

弥生時代の遺構 ①区の中央付近で検出した土壌墓（遺構 654）がある。平面形状は楕円形で、長さ 1.3m 以上、幅 1.1m、深さ 0.35m を測る。土坑の中央で 2 個体の弥生土器（高杯・壺）を検出しているが、その出土状態から高杯は土坑の底面に、壺はそれより上位に供献していたことが窺える。

平安時代の遺構 ①区で検出した土坑（遺構 694）がある。北側が調査区域外となり南側は大きく攪乱され、全容は明らかでない。現存する規模は、長さ 1.3m 以上、幅 1.6m、深さ 0.3m を測る。遺物としては、土師器、黒色土器、銭貨があり、土器の特徴から平安時代後期の遺構であると考えられる。

鎌倉時代の遺構 鎌倉時代の遺構には、掘立柱建物 1 や井戸（遺構 185）、溝（遺構 560・569・602）、土坑などがある。

掘立柱建物 1 ①区の中央付近で検出した。東西 8.4m、南北 5.4m で、主軸方向は N-108°-E を指す。



遺構 654 供献土器出土状況 南から



③区-2 全景 南上空から

東西 4 間、南北 2 間以上に復元することができる。柱穴は円形で、直径・深さとも 0.3～0.4m を測る。遺物は、柱穴から土師器・瓦器などが出土している。

遺構 185 ③区-1 の第 3 遺構面で検出した井戸である。井戸枠が存在したか明らかでないが、直径 1.1m で、深さは 1.5m 以上を測る。周囲は南北 4m 以上、東西 5m の範囲で窪んでおり、これは掘形か、井戸を埋め戻す際にできたものであると考えられる。遺物は、土師器・瓦器・国産陶器などが出土している。

遺構 560・569・602 ③区-2 の第 3 遺構面で検出した溝である。3 本の溝として扱っているが、出土遺物や軸方向から一連の溝であると考えられ、溝 560・569 と直交するように溝 602 が伸びる。幅 0.7～1.4m で、断面形状は舟底状を呈する。砂地であることから排水用ではなく、区画を目的とした溝であると想定できる。遺物は、土師器・瓦器などが出土している。

室町時代の遺構 ③区-2 の第 3 遺構面で検出した溝（遺構 600）がある。鎌倉時代の溝（遺構 602）と同じ方向で、最も残りの良い箇所では幅 3.0m、深さ 0.8m を測る。遺物は、土師器や国産陶器などが出土している。

江戸時代の遺構 礎石建物 4 棟や溝、柱穴、石組遺構（遺構 755）、土坑 埋桶などがみついている。

礎石建物 ③区-1 で 2 棟、③区-2 で 2 棟を第 1 遺構面で検出した。調査区が狭いことから確認できたのは建物の一部で、攪乱などによって礎石のいくつかは削平されていた。礎石建物 1 が 6.5m × 2.3m 以上で、礎石建物 2 が 4.0m × 3.0m 以上、礎石建物 3 が 6.0m 以上 × 4.6m 以上、礎石建物 4 が 4.0m 以上 × 1.0m 以上を測る。礎石は扁平な砂岩で、地山を浅く掘りくぼめて据えていた。礎石建物 1 の礎石の傍で文字を書い



遺構 755 石組検出状況 北から

た土師器皿が出土している。

遺構 755 ②区の第1遺構面で検出したもので、枡状に石組みした土坑である。掘形が隅円方形で、南北1.65m、東西1.55mを測る。石組は約1.0m四方で、深さは0.8mを測る。石材は10～30cm程度の角のある砂岩質のものが多く、上端部を中心に平瓦を用いていた。また、サンゴも部分的に使用されていた。出土遺物から幕末頃のものであると考えられ、地下倉庫的な貯蔵穴である可能性が高い。

出土遺物

遺構などから出土した遺物は、収納コンテナに72箱出土している。弥生時代から近世にかけてのものがある。

弥生時代の遺物には、土墳墓に供献されていた中期後半の壺・高杯がある。平安時代の遺物には土師器・黒色土器や銭貨がある。鎌倉時代から室町時代の遺物としては、土師器・瓦器・山茶碗・中国製磁器（青磁・白磁）・国産陶器などがある。

江戸時代の遺物は、後半代でも幕末頃の国産陶磁器類が非常に多い。このほかの近世の遺物としては、土師器、塩壺、土人形、銭貨（寛永通宝・天保通宝）・石臼・硯・砥石・基石・鉄釘・鉄滓・瓦などがある。

これらのうち、特徴的な遺物として「呪文を書いた皿」・「南紀男山焼」・「砂糖製作鉢」がある。

呪文を書いた皿 江戸時代の遺構面からは、文字を書いた土師器皿が多くみついている。出土状況から2個セットになると考えられ、二つのタイプが存在する。一つは、内面に梵字、漢字、異体字を書き連ねたもの（写真）で、もう一つは薄く釉薬をかけた内面に梵字一文字を書くものである。これら建物礎石の傍な



呪文を書いた皿

どで出土していることから地鎮に用いられたものであると考えられる。写真の皿には、「急急如律令」の文字を読み取ることができ、これは中国漢代の公文書の末尾に書かれた決り文句で「急いで律令の如く行え」の意であり、陰陽道や密教など呪文に取り入れられ「願いを早く叶えたまえ」などといった意味で用いられたものである。

砂糖製作鉢 瓦溜や漏斗・糖漏などと呼ばれる素焼きの土器で、圧搾したサトウキビ液を流し込んで、固形化した砂糖を作るものである。直径36cm、高さ30cm、底径11cmで逆円錐台形を呈し、底には直径3cmの円孔を穿っている。この鉢の使用方法是江戸時代に書かれた「砂糖製作記」や中国の明の時代に書かれた「天工開物」などから窺うことができる。これが出土したことで、城下町の一画で砂糖を製作していたことが明らかになった

南紀男山焼 広川町にあった陶磁器窯で焼かれた製品で、窯は文政10年（1827）に紀州藩の支援のもと崎山利兵衛により開かれ、明治11年（1878）まで操業されている。製品の大半は伊万里焼を模倣した日常



砂糖製作鉢



南紀男山焼

雑器で、銘がない限り伊万里焼との判別は難しい。発掘調査で出土することも少なく。南紀男山焼の流通圏を考える上で良好な資料といえる。

まとめ

弥生時代 弥生時代の遺構としては、西端の調査区である①区において土器を供献した土壌墓を1基検出した。隣接する昨年度の調査区でも土器を供献した土壌墓を検出しているが、今回の調査で東側となる②区・③区では、弥生時代の遺構も遺物も確認できない。周辺地域の例では、弥生時代から古墳時代にかけて海岸砂丘上を墓地として利用することが多く、これらは砂丘陵線付近に展開する。今回の調査においても、西側が高く東側に低くなっており、砂丘陵線から後背地に向かう地形を看取することができる。①区や昨年度の調査区付近は、ちょうど砂丘陵線付近に相当し、周辺地域と同様に弥生時代の墓地として利用されていたことが窺える。

今回みつかった土壌墓に供献されていた土器は壺（水差形土器）と高杯で、昨年度の器種構成と同じである。周辺地域の例では弥生時代の土壌墓に供献される土器の器種や形態は、時代によって違いを見出すことができる。中期前半代までは甕・壺が主に供献されるが、中期半ば以降になると甕は供献されず壺・高杯・鉢が主流となる。中期後半代になると壺では、把手を付した水差形土器が多くなる。今回みつかった土壌墓も中期後半のものであり、内容は今までの例に反するものでない。

中世 中世の遺構としては、井戸や掘立柱建物、溝、土坑などみつかっており、周辺に集落が広がっていたことが窺える。遺物から判断すると時期的には13世紀代が中心で、長期にわたって営まれた集落でない可能性がある。遺物の中には少ないながらも中国製の白磁や青磁が含まれることは、集落の性格を考える上で重要であろう。また、瓦器碗に混じって東海地方の山茶碗も一定量出土している。那智勝浦町の川関遺跡では茶碗のほとんどを山茶碗が占め、和歌山県北部地域では茶碗のほとんどが瓦器碗であることから、両者が一定量出土するのは、田辺地方の特徴といえるかもしれない。

現在、街中に残る地割は、少なくとも江戸時代には

すでに形成されていたことが当時描かれた絵図などから窺える。地割は、田辺城に近い方では縦横に直交して整っているが、城下の東側となる今回の調査区付近では、それらとは異なる地割で道々に方向性を見出せない。今回の調査では、同一軸をもつ鎌倉時代と室町時代の溝を検出したが、これらは直近の湊本通の地割に沿っている。昨年度の調査でも平行する鎌倉時代と室町時代の溝を検出したが、これらは直近の海蔵寺通の地割に沿い、今回見つかった中世の掘立柱建物も同じ軸方向で建てられている。これらのことから、調査区付近でみられる地割は江戸時代からさらに遡り、周辺が集落として使われるようになる鎌倉時代のもを踏襲していることが窺える。

江戸時代 江戸時代の田辺城下を描いた絵図は何枚が残されているが、これらのなかに明治時代になって宝永年間（1704～1710年）に描かれた絵図を写したものが伝えられている。堀、足輕屋敷、寺、町屋などが色分けして克明に描かれているもので、海蔵寺の南側を東西に走る現在の海蔵寺通も存在する。絵図から窺うと、今回の調査区は江戸時代の半ば頃には町屋の東端だったことになる。

発掘調査では、礎石建物や土坑、埋桶などがみつかっており、これらは町屋にかかわる遺構であるといえることができる。

江戸時代の遺物は、ほとんどが後半代以降で、なかでも幕末頃のものが大勢を占めている。このことから、調査区付近が町屋として画期を迎えるのは江戸時代でも終わり頃になってからであると考えられる。遺物には日常雑器や生活道具が揃っており、茶道具や碁石などの出土もあり、当時の生活を復元することが可能である。

今回の調査では、砂糖を製造する鉢が③区-1・2で数個出土しており、調査地付近でサトウキビ製の砂糖をつくっていたことがわかった。江戸時代の文献には、砂糖にかかわる記録は残っていないが、刈り取ってすぐにサトウキビを圧搾するのが効率的に良いことから、近場でサトウキビの栽培もおこなわれていたことが窺え、当時の産業を考える上でも興味深い発見である。

（川崎雅史）

丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡の 出土遺物整理

遺跡の時代：縄文～室町時代

所在地：伊都郡かつらぎ町丁ノ町、西飯降

調査の原因：京奈和自動車道（紀北東道路）建設

作業期間：2008.04～2009.03

対象コード：06-13・027、06-13・026、07-13・027

平成18年度と平成19年度に調査を行った丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡では、縄文時代の集落、弥生時代中期の集落、古代の建物群や条里水田など、縄文時代から室町時代の長期におよぶ遺構が発見された。

調査で出土した遺物は、収納コンテナ363箱分にもおよび、中には北陸地方から運ばれた石斧や、弥生時代の絵画土器、県内最古の下駄など類例の少ない遺物も存在する。

整理作業の初年度となる今年度は、基礎的な洗浄・



西飯降Ⅱ遺跡の絵画土器

注記・接合作業を中心に行った。

整理作業の結果、弥生時代中期では丁ノ町・妙寺遺跡と西飯降Ⅱ遺跡では遺跡存続時期が異なることが判明した。また、整理作業の過程の中で、絵画土器が新たに見つかり、県内最多の出土数となることがわかった。

古代の建物群周辺から出土した墨書土器や製塩土器の存在から、9世紀代の役所の出先機関のような性格が想定できる。来年度も整理作業を継続し、報告書を刊行する予定である。（田中元浩）

野田地区遺跡の出土遺物整理

遺跡の時代：古墳～室町時代

所在地：有田郡有田川町野田

調査の原因：高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設

整理期間：2009.03～2009.10

対象コード：05-21・038、06-21・038、07-21・038

平成17～19年度の3年次にわたる発掘調査で出土した収納コンテナ38箱分の土器や約100点の木製品の整理作業と、報告書作成に伴う諸作業を次年度にかけて行っている。

調査では、段丘下の沖積地を流れる流路から古墳時代から中世にかけての保存状態がよい多くの遺物が出土し、さながらタイムカプセルのような遺跡である。

古墳時代の遺物としては、高床式建物などの建築部材（柱材・垂木・小舞・梯子など）や机・椅子などの調度品、機織具（輪状式原始機）の経送具と考えられ



古式土師器(壺)の復元作業

る部材のほか、土器では多くの壺・小型丸底壺が、古代では土器類とともに犁や桧扇などが出土した。また、隣接地では、以前に古代の祭祀に使われる形代や中世の呪いなどに使われる柿（こけら）経などが出土している。

これらの遺物内容から、遺跡付近は古墳時代から中世にかけては一般集落とは異なった空間域であったことが窺え、今後、遺物の検討を行って遺跡の実態に迫りたい。（川崎雅史）

重要文化財 天満神社本殿ほか 1 棟の保存修理

建築年代：本殿・慶長 11 (1606) 年、末社多賀神社・慶長
所在地：和歌山市和歌浦
修理の種類：屋根葺替、部分修理
修理期間：2008.02 ～ 2008.12

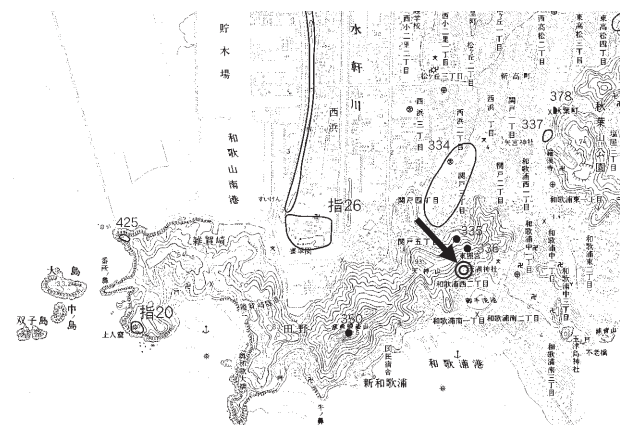
平成 21 年 12 月、11 箇月の期間をかけて重要文化財天満神社本殿ほか 1 棟の保存修理事業が完了した。平成 20 年 2 月から開始した事業は、初年度に本殿の仮設工事を着手し、屋根檜皮材の調達および拵えを進めた。同 4 月からは本格的に現地での施工を開始し、6 月末までに檜皮屋根の葺き替えを完了した。また、屋根工事に伴い、箱棟の飾り金具や木部、塗装などの修理を行った。

当初、本殿は屋根廻りのみを補修する計画であったが、本殿外陣天井画の破損が想像以上に進んでいたことが判明したため、文化庁の計画変更許可を得て、屋根工事に引き続き剥落止めを施工した。

また、本殿の東北に位置する末社多賀神社は、手前に生えていた松の太木が枯死し、建物直下に伸びた根が腐って地盤沈下を起こしていたため、ジャッキアップを行い、セメントを用いて基礎を補強し、建物の傾きを補整した。

檜皮屋根は通常 2 ～ 30 年程度で葺き替える必要がある。天満神社では昭和 51 年に前回の葺き替えを行っているので、およそ 32 年ぶりの施工となった。

天満神社が位置する和歌浦の地は、強い潮風が吹



天満神社の位置



本殿西面屋根 檜皮平葺き施工の様子

きつけ、檜皮屋根を維持するには厳しい環境である。実際修理前には、隅棟などの端部に度重なる補修の跡が認められ、台風などで痛んだ部分をその都度丁寧に修理し続けたことで、長期にわたり良好な状態が保たれてきたことがわかる。

また、境内地は天神山の中腹に開かれており、敷地北側には斜面が迫るが、本殿に覆い被さるように茂っていた樹木を伐採し、石垣を覆っていた崩土を鋤取り、日照や通風の確保、枝葉の落下防止策などが講じられたことの効果も大きい。

しかし境内が荒れ、十分手がかけられていたとは言えなかった昭和 51 年修理前の状況下でも、屋根は健全とは言えないものの大きく破損することはなく、37 年間維持されていた。葺き替えの周期が短くなってきたと言われる現況において、十分な品質の屋根材確保や施工技術の検証など、今後の課題は大きい。

本殿の屋根が葺きあがるタイミングに合わせたかのように、天満神社を含めた和歌浦地区が和歌山県の史跡・名勝に指定された。また、多くの関係者の尽力により、神社にゆかり深い丑年を、竣工した晴れやかな姿で迎えることが出来た。（多井忠嗣）



本殿外陣天井画 膠注入による剥離部分接着の様子

重要文化財 旧中筋家住宅の保存修理

建築年代：江戸時代末期

所在地：和歌山市禰宜

修理の種類：半解体修理

修理期間：2000.02～2010.03

重要文化財旧中筋家住宅の保存修理事業は、文化財管理団体である和歌山市が事業主となり、当センターは設計監理業務と修理修復業務を受託している。平成12年に開始したこの保存修理事業は8年を経過し、着々と完成に近付いている。今年度は未指定文化財の茶室、味噌部屋、人力車庫の3棟の修理を中心に、そのほか主屋、表門、土塀の修理を進めた。

主屋

前年度で素屋根を解体し、ほぼ完成に近い主屋は、残る左官工事と建具工事を中心に工事を進めた。左官工事については、保存できる壁は極力保存するよう技能者と検討しながら修理を進めた。修理が必要な壁については中塗り、漆喰塗り、砂壁塗りをを行い、カマドの漆喰塗りを除く全ての左官工事は終了した。建具工事では破損がひどく再用出来ない障子類や、現状変更により復原した板戸など計30枚の建具を新たに製作した。また、当初は今年度で襖の修理を予定していたが、修理方針の入念な検討が必要であると判断したため、施工は次年度に見送った。



旧中筋家の位置



表門素屋根の解体状況

表門

表門は木工事、屋根工事が完了した状態で今年度を迎え、左官工事を中心に工事を進めた。屋根工事に続いて鬼瓦の影盛と棟積みの目地漆喰塗りをを行い、雨樋を取り付けた後、7月には素屋根を解体した。壁については主屋と同様に、保存できる壁は極力保存するよう技能者と検討しながら修理を進めた。修理が必要な壁については中塗り、漆喰塗り、黄大津壁塗りをを行い、これで全ての左官工事が完了した。また、雨樋工事に関しては雨樋、樋受金物共に出来る限り現状のものを修理して再用し、不足分のみ補足して施工した。そのほか、石橋の据え直しや雨落ち溝の修理を行い、主要な工事はほぼ完了した。

土塀

土塀は北西および南西土塀、内郭土塀の修理を行った。北西・南西土塀は屋敷外面を本瓦葺き、内面を棧瓦葺きとし、内郭土塀は両面共に棧瓦葺きとする黄大津壁塗り仕上げの土塀である。破損の大きな所は瓦や土レンガを使って本体を積み直し、屋根瓦を葺き、北西と内郭土塀については荒壁付けまで施工した。次年度で残る表面の仕上げ塗りを施工



北西土塀の本体積みの状況



茶室の屋根葺き状況

し、完成の予定である。

茶室

茶室は主屋の北西に位置し、桁行3間、梁間2間、4畳半の茶室と水屋からなる寄棟造、棧瓦葺きの建物である。今年度は基礎工事、木工事、左官工事、屋根工事を行った。基礎工事では礎石を据え直し、木工事では古材を修理し、傷みの激しい部材は取り替えてから軸組、小屋組と組み上げていき、屋根野地板を取り付けた。左官工事は竹小舞を搔いて壁下地を作り、荒壁付けを行った。屋根工事では古い瓦を出来るだけ再用することを心がけ、再用瓦は洗浄して使用し、不足分のみ補足して土葺きで施工した。

味噌部屋

味噌部屋は主屋の西に位置し、桁行3間半、梁間2間、4畳半の畳敷きの部屋と土間の味噌部屋からなる切妻造、棧瓦葺きの建物である。これも茶室とほぼ同様の工程で基礎工事、木工事、左官工事、屋根工事を進めた。屋根下地については旧来通りの土居葺きを採用し、杉板を竹釘留めで葺き立てた。

人力車庫

人力車庫は表門の北西に位置し、桁行3間、梁間



味噌部屋の小舞搔きの状況



味噌部屋の土居葺きの状況

2間半、北側に牛小屋、南側に人力車庫と便所を設けた切妻造、本瓦葺きの建物である。この建物は修理事業終了後の一般公開時に管理棟として利用される予定である。今年度は基礎工事、木工事、左官工事、屋根工事を行った。基礎工事においては礎石を一旦撤去し、コンクリートのベタ基礎を施工した。その際に礎石位置のうち6か所にアンカーボルトを植え込んでおいて礎石を抜き通し、柱と緊結した。その他の木工事、左官工事、屋根工事については茶室と同様の工程で施工した。

未指定文化財である上記の茶室、味噌部屋、人力車庫については構造体の復旧工事を本事業で実施し、残る造作修理工事は別途和歌山市の単独事業で実施されるため、本事業での3棟の修理工事はこれですべて完了した。

保存修理事業はいよいよ次年度で終了する。敷地内の素屋根も全て取り払われ、外観はほぼ完成に近い姿となった。最終年度は主屋と表門の襖、畳の修理や主屋カマドと土塀の仕上げ塗りを行う予定である。

(増野真衣)



人力車庫の野地板打ちの状況

旧中筋家住宅 未指定文化財等の保存修理

建築年代：江戸時代末期他
所在地：和歌山市禰宜
修理の種類：解体修理
修理期間：2008.07～2009.03

今年度は和歌山市の単独事業として旧中筋家住宅敷地内に建つ未指定文化財（茶室、味噌部屋、人力車庫）の造作修理、便所の屋根工事、庭園修理等を行うことになり、それらの修理業務が二事業にわたって発注され、当センターが受託した。

茶室

茶室は別途の重要文化財保存修理事業で構造体の組み上げと屋根葺き、荒壁付けを施工しており、それに引き続いて造作修理工事にとりかかった。基礎工事は内部と外部軒内の土間叩きを行い、木工事は内部の天井張り、床組、外部腰壁の杉皮張り、押さえ竹の取り付け、そして棚や戸袋等の造作修理を行った。左官工事は中塗りを経て、外部の鼠漆喰塗り、黄大津壁塗り、内部の砂壁塗りを施工した。また、茶室の炉の内部も黄大津壁塗り仕上げた。建具については雨戸、障子、襖の全てが残存しており、修理して再利用することが出来た。畳については旧来のものが失われていたので、紀州産の藁を使用した畳床を製作し、表と縁を取り付けて敷き込んだ。屋根軒先に雨樋を取り付け、電気設備と給水設備を設けて茶室の工事は完了した。



竣工 茶室内部



竣工 味噌部屋外部

味噌部屋

味噌部屋も茶室同様、別途修理事業に引き続いて造作修理工事を行った。基礎工事は内部の土間叩きを行い、また外部軒内の雨落ち溝の修理と南側の敷き込み瓦の修理も行った。木工事は西側部屋の内部の床組と内外の腰壁板張り、棚や戸袋等の修理を行った。また、修理後の公開活用に向けて味噌部屋の内部に新たに床を設けた。左官工事については中塗りを経て外部の浅黄大津壁塗りと内部の黄大津壁塗りを施工した。また残存していた建具は出来る限り修理して再利用したが、欠失したり大破して再利用不能であった板戸と障子の計7枚は従来のものに倣って新調し、建て込んだ。畳については旧来のものが失われていたので、茶室と同様に紀州産藁床の特注品を製作して敷き込んだ。屋根軒先に雨樋を取り付け、電気設備を設けて味噌部屋の工事は完了した。

人力車庫

人力車庫も上記2棟と同様、別途修理事業に引き続いて造作修理工事を行った。基礎工事は内部と外部軒内の土間叩きを行い、木工事は人力車庫内部の天井張り、便所部分の床組、外部及び通路部分の腰



竣工 茶室外部



竣工 味噌部屋内部（西側部屋）

壁板張り、便所汲み取り口まわりの造作等の修理を行った。左官工事は牛小屋内部を除く内外の土壁に中塗り、漆喰塗りを施工した。牛小屋内部については本来は荒壁仕上げであったが、一般公開後は管理人室として使用されることもあり、中塗りの仕上げ塗りをを行った。建具は大破して再用不能であったため、計7枚の板戸を従来のものに倣って新調し、建て込んだ。屋根軒先に雨樋を取り付けて人力車庫の工事は完了した。

便所

便所は味噌部屋の北側に位置しており、桁行2間、梁間1間、東の浴室と西の便所からなる切妻造、棧瓦葺きの小規模な建物である。修理後の一般公開に際して見学者用の便所が必要であるため、この建物を撤去して同じ場所にほぼ同規模の新設便所を建設することになった。建設工事は和歌山市の別途事業で行われたが、景観上の配慮から旧便所の瓦を新設便所の屋根に葺くことになり、当センターは屋根工事を受託した。旧便所の瓦を解体し、打音検査を実施して再用、不再用を判断し、再用瓦は洗浄して使用した。およそ半数の瓦が不足したため、類似の既



便所 屋根葺き状況



竣工 人力車庫外部

製品瓦を購入し、古い瓦を南面、補足瓦を北面に葺いた。屋根下地にはアスファルトルーフィングを敷き込み、瓦桟を打って空葺き工法で棧瓦を葺いた。棟には旧便所の鬼瓦を据え、棟積みは旧来通り土葺きで施工した。

庭園

庭は、南庭園と東庭園の修理工事を行った。南庭園は主屋・座敷の縁から眺めることの出来る庭園である。崩れていた池の縁石、立石、灯籠を一旦解体し、据え直しを行った。また池の西側にある石垣が大きくはらみ出してきたため、一旦解体して積み直しを行った。東庭園内にある水溜井（仮称）についても周囲の樹木の根に押されて石垣が崩れ出してきたため、一旦底面まで解体して根を伐採し、改めて積み直しを行った。

以上5件の修理工事のほか、南庭園に2か所、北庭園に1か所の散水栓を設置し、それらの水道管の地中埋設工事を行った。また屋外電気工事として茶室西側にハンドホールの設置、配管工事を施工し、本事業は完了した。

（増野真衣）



竣工 南庭園

重要文化財 金剛三昧院 客殿及び台所ほか 1 基の保存修理

建築年代：江戸時代前期

所在地：伊都郡高野町高野山

修理の種類：半解体修理、屋根葺替

修理期間：2008.01～2013.03

概要

金剛三昧院客殿及び台所ほか一基保存修理事業は、平成20年1月から平成25年3月までの63ヶ月間で行う予定である。前年度は仮設事務所の建設や地質調査を行った。平成20年度は仮設工事、解体工事、基礎工事、木工事、建具工事、表具工事を行い、並行して各部の仕様や変遷などの調査、基本図面及び変遷図などの作成、発掘調査、構造診断及びそれに伴う実物大実験を行った。

仮設工事

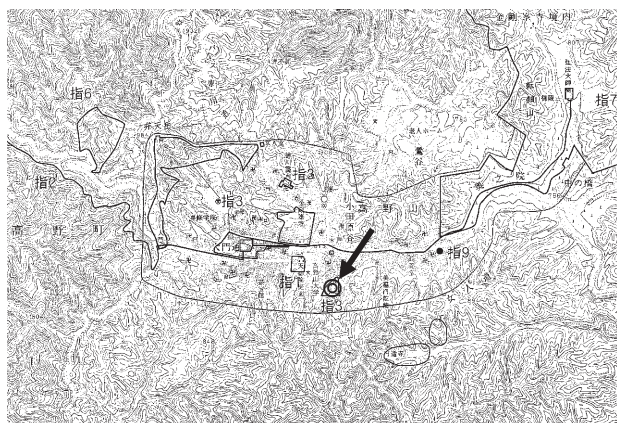
仮設寺務所兼会下入口、本堂入口、客殿・台所南側軒足場兼仮設通路、客殿西側軒足場、資材置き場、作業小屋を建設した。

解体工事

客殿全室と台所一部の解体を完了した。解体範囲は、木部は柱間装置と床組、小壁は建て起こし時に影響する柱際のチリを解体した。解体部材は資材置き場に運搬後、再用材と不再用材に分類し、清掃を行った。

発掘調査

床組の解体が完了し、床下に堆積した木端やゴミ



金剛三昧院の位置



客殿、台所前の仮設通路兼軒足場

などを除去すると、部屋によって床土間面の仕上げに差があることが判明し、大広間には礎石の抜き取り痕と見受けられる窪みも散見されたことから、これらは前身建物の遺構であると考えられた。また、土室の間において現在失われている土室(高野山独自の暖房設備、煙道付きの囲炉裏)の存在を明らかにするために、土室の柱が建っていた礎石もしくははその痕跡を確認する必要があり、前身建物の遺構調査と併せて、発掘調査を行うことにした。ただし、金剛三昧院境内は史跡金剛峯寺境内の一部に指定されているため、文化庁の現状変更許可を得た上で発掘にあたった。発掘調査の詳細は別項で報告する。

木工事

床組の解体完了後、柱筋ごとに柱の建て起こし及び不陸調整を行った。修理前には全長が残る柱は数本しかなく、その他は過去の修理で足元を切断され、丸太などの飼物を入れるだけの姑息的な納まりであったため、柱足元の根継ぎを行った。根継ぎは水湿に強い高野槓で行い、材木は金剛三昧院境内の立木を伐採して使用した。今回の修理では軸部を解体しない為、根継ぎの継手の仕様に制限が生じ、根継



客殿大広間解体完了並びに発掘状況



軸組みの修理状況

ぎ材とその上部を固めることが難しくなるが、これは補強金具を取り付けることによって対処した。根継ぎを終えた個所から順次柱筋の大引・根太を加工し取り付けた。当初材は可能な限り再利用し、中古材は再利用可能なものは必要に応じて仕口を作り直して再利用した。取替え材は根継ぎ材と同じく榎を使用した。

建具工事

木部の解体に先立ち建具を取り外し、洗浄した後、必要に応じて補修を行った。今年度は客殿の部戸内障子、上段西広縁腰障子、南広縁腰障子を補修した。

表具工事

美術工芸品で重要文化財指定されている襖 14 枚と、その他の障壁画が描かれた襖及び張付壁は、劣化・損傷が顕著に認められたため、重文指定襖に関しては美術工芸品の保存修理事業として、未指定障壁画に関しては当事業の一環として修理を行う。修理は選定保存技術保存団体に認定されている国宝修理装演師連盟が行う。運搬時の絵の具の剥落を防ぐため、^{にかわ}膠や^{ふのり}布海苔で剥落止めを施した後、専門業者によって梱包、運搬され、高野山霊宝館に搬入し、^{くんじょう}燻蒸処理をした。その後、今年度修理分の襖 10 枚、



大床障壁画の解体状況

張付け壁 1 面は国宝修理装演師連盟の工房に運搬して修理が施され、その他は高野山霊宝館平成大宝蔵に仮安置した。

構造診断及び実物大実験

工事の実施に伴い、建物の構造強度、耐震性能に関し、重要文化財(建造物)耐震診断指針に基づいて所有者診断を行ったところ、基礎診断を実施する必要があるという結果となったため、財団法人建築研究協会に構造診断を依頼した。診断は限界耐力計算法によった。ただし、当建物は内法に壁が少なく、舞良戸や板戸などの使用個所が多いため、建具が耐震性能にどの程度影響を及ぼすかを実物大実験によって検証し、その結果を用いて診断した。実物大実験は 1 スパン分の構造体及び舞良戸を 3 体作成し、静的載荷試験により耐力を比較した。診断の結果、大地震においても建物の応答変形角が桁行・梁間とも 1/15rad 以下となり、倒壊には至らないとされた。

調査及び修理方針の策定

柱間寸法及び矩計寸法の詳細実測を行い、その結果を精査し、柱間及び矩計の計画寸法を決定した。また解体に並行して建物各部分の実測と痕跡調査を行い、調書を作成した。特に改変回数が多い持仏の間、角の間西五疊の間、土室、台所は個別に変遷図を作成した。持仏の間の変遷は「関連研究」で報告する。建物全体がどのような変遷をたどったのかを整理し、江戸時代前期の建立から現在までを大きく 7 時期に分け、各時代の図面を作成した。これらの資料をもとに、客殿部分の修理方針・活用計画を立て、文化庁、所有者、事業主と協議を行った。その結果、過去の姿への復元は行わず、現状の姿を維持した修理を行う方針とした。(結城啓司)



実物大実験状況

重要伝統的建造物群保存地区 湯浅町における伝統的建造物の 保存修理技術指導

建築年代：江戸時代～昭和初期

所在地：有田郡湯浅町湯浅

修理の種類：伝統的建造物群の保存

湯浅の町並については、平成5年頃から伝統的建造物群(伝建)としての保存と活用が提起され、各地区や行政において議論がなされ始めてきた。このような経過のなか湯浅町が国庫補助事業として、平成11・12年度において、伝統的建造物群保存対策調査を実施した。この調査は大学等研究機関が中心となり、当センターもその一部を受託して積極的に支援し、その調査報告書を刊行した。

この成果を基に、町は文化庁の指導を得ながら積極的に地域住民と協議をすすめ、文化財保護法・都市計画法・建築基準法に関わる町の関連条例を制定し、その保存と活用の方策を定めた。その結果、平成18年12月19日に文化庁から、県内で初めて重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定された。

湯浅は中世から始まった醤油醸造の中心地で、近世には紀州藩の保護を受け全国にその販路を広げ、漁網や金山寺味噌他の製造販売など商工業も盛んとなり、藩内有数の商工業都市であった。

この保存地区は町の北西部に位置し、北町・濱町・中町及び鍛冶町の各一部に当たり、東西約400m、南北約280mの約6.3haの広さである。北は山田川



湯浅町の位置



北町地区界隈

と大仙堀に接し、近世の地割をよく残し近世から近代にかけての瓦葺の町屋と土蔵等で構成される重厚な歴史的風致をよく伝えている。

このような中、平成19年度から町が着手した保存修理と修景に関する国庫補助事業の技術指導を担当センターは受託してきた。町は廃業していた『甚風呂』(明治中期頃建築、大正末改築)を購入し、来訪者の休憩と地域住民とのふれあいの場として活用するため、継続事業として構造補強と風呂・居宅・倉庫部分を復原するとともに、全体の修理・修景を行った。

個人住宅については、本年度は酒井家住宅ほか3件の修理・修景事業に対して町が間接補助を行い、伝統的景観や住環境の改善が図られるとともに、住民による自主的な保全やまちづくりがすすめられ、その成果が形になりつつある。

さらに、この重伝建地区の東部を南北に通過する近世熊野街道に沿って、優れた商家を中心とした町屋群が連続して残されている。この地域は重伝建地区とは異なる街道筋の景観がよく残されており、この対策が今後の課題であろう。(山本新平)



保存修理工事の見学者

闘雞神社 文化財建造物の調査

建築年代：江戸時代、元和6年(1620)～延享5年(1748)
所在地：田辺市湊
修理の種類：文化財指定ランクアップ事業

当社は田辺市湊の仮庵山北麓に鎮座し、創建は詳らかではないが、社伝では11世紀に熊野別当湛快(一八代)が熊野三所権現を勧請したとされる。闘雞神社の名は、源平合戦の折りに、湛快の子湛増(二一代)が紅白に分けた雞を戦わせて源氏方につくことを決め、熊野水軍を壇ノ浦へ出陣させた『平家物語』などで知られる故事に由来すると伝えられる。

熊野十二神を主祭神とし、ほぼ北を正面とし上段には一文字に社殿群を配置し、東から順に西神社、本殿、上神社、中神社、下神社、八百万神社が連続して建ち並び、壮観な構えとなっている。

本殿 桁行2間、梁間1間、隅木入春日造、檜皮葺。身舎の後1間を内陣に前1間を外陣に区画し、内外陣境に引戸、外陣正面に蔀戸、右側面は引戸とし、正面に1間の向拝を付ける。身舎四周に縁を巡らせ、正面に木階を構え擬宝珠高欄を置く。いわゆる熊野造で、外部は平彩色と弁柄塗とし、様式からみて棟札にある寛文元年(1661)の建築と考えられる。

西神社 桁行3間、梁間2間、入母屋造、銅板葺。身舎の後通りを3室の内陣に、前通りを1室の外陣に区画する。間仕切は本殿と同様で、正面に3間の



八百万神社から上手を望む

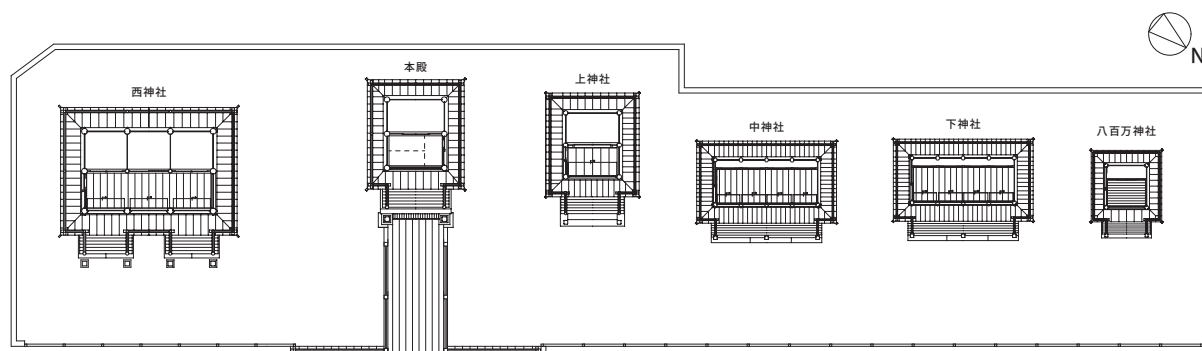
向拝を付ける。縁も同様とし、正面両端間に木階を構え擬宝珠高欄を置き、内陣両脇間に二柱を祀る相殿とする。装飾部分を除き素木とし、様式からみて棟札にある元文2年(1737)の建築と考えられる。

上神社 本殿より僅かに小規模な熊野造とし、平彩色と弁柄塗とする。様式は本殿よりも古式で、古記録にある元和6年(1620)の建築と考えられる。

中神社、下神社 共に4間社流造、銅板葺。梁間1間分を身舎とし後端を内陣、前半を外陣に区画し、正面全体に木階を構え擬宝珠高欄を置く。前面に中柱を抜いた2間の向拝を付ける。様式からみて、棟札にある延享5年(1748)の建築と考えられる。

八百万神社 1間社隅木入春日造、銅板葺。身舎1間を内外陣に区画し、向拝を付ける。様式からみて、棟札にある延享5年(1748)の建築と考えられる。

熊野十二所権現を祀る社殿構えとその構造は、規模こそ異なるものの熊野本宮大社の形式を今に伝える。各社殿は造営年代が確定できるとともに、古記録から修理の時期も判明し、熊野信仰を知る上からも非常に貴重な建築群である。(山本新平)



闘雞神社配置図

[資料紹介]

中飯降遺跡 縄文時代の大型竪穴建物

概要：中飯降遺跡では、縄文時代の大型竪穴建物が複数発見された。西日本では類例のない規模であり、これまでの縄文時代観に一石を投じる資料となった。

遺跡の概要 中飯降遺跡では、調査区東側の2区・3区・8区・9区において、縄文時代後期前葉を中心にまとまった遺構群を検出した。紀ノ川氾濫原を南に、中谷川を東に望む見晴らしの良い低位段丘崖上に、大型竪穴建物3棟が位置する。調査区内では、大型竪穴建物周辺の西側および北側に、ほぼ同時期と思われる竪穴建物3棟、配石遺構3基などを検出した。遺跡の範囲としては、現中飯降集落が存在する南側にも広がるかと推定できる。

大型竪穴建物群 大型竪穴建物は、可能性のあるものを含め3棟ある。東端に位置する9001大型竪穴建物は、平面形は楕円形で長軸を南北方向に配する。その5m西に位置する9100大型竪穴建物は、長軸を東西方向に配する。9100の南西に近接して、9150大型竪穴建物が存在するが、調査区外にかかるため全容は明らかでない。以下、各遺構を詳述する。

9001 大型竪穴建物 9区で直径約14mの円形状に検出し、北半は調査区外に広がる。現有道路を間に挟み、3区で北端部が検出されたため長径16～17mの楕円形になる可能性がある。掘り込みの深さは約50cmある。検出した範囲では、床面中央に炉1基があり、主柱穴が3基ある。全容を復元すると柱は全部で5～6本と推定できる。

主柱穴は平面の直径が約2.0m、深さ約1.1mある巨大なもので、一部に根固めの石が残る。根固めの石の内周から、柱の直径は約30～40cmと推定できる。断割調査により、3基の柱穴とも当初の据付け掘方に、柱の抜き取り痕跡が重複することがわかった。このため、柱の据付け時には全ての柱穴に根固めの石を設置していた可能性も残る。

炉は長径70cm、短径40cmの楕円形で、約7cm

の浅い掘り込みがある。炉の長軸は竪穴建物の長軸とほぼ同方向である。周囲には拳大の円礫が多く、被熱して赤化するが、人為的に配されたかは不明である。

竪穴建物南端には、内側に張り出す台状の遺構がある。径2.5mほどの半円形に近い形状に基盤層を掘り残し、床面から高さ20cmの段差を設ける。立地からみて、入り口に関係する可能性がある。

竪穴建物埋土には大量の土器片とともに、人頭大の円礫が多数含まれる。土器片は上層では細片となっていたが、床面近くでは比較的まとまって残存していた。円礫は、部分的にまとまりがあり配石遺構などになる可能性もある。また、竪穴建物の東側肩口には2基の埋設土器がある。北端部の3区でも2基の埋設土器がある。大型竪穴建物との先後関係は不明であるが、後述する9100大型竪穴建物の状況を加味すると、竪穴建物廃絶後に埋設された可能性がある。

9001大型竪穴建物の出土土器の型式は、床面や柱穴埋土には、中津式、福田KⅡ式、松ノ木式、広瀬土坑40号段階などに相当するものがあり、竪穴建物埋土は北白川上層式1期、2期に相当するものが中心である。

なお、9001大型竪穴建物と9100大型竪穴建物の間には南北方向の溝がある。この溝は、9001大型竪穴建物の南側までめぐり、建物に付随する可能性がある。

9100 大型竪穴建物 長径約16m、短径約14mあり、北側の一部が調査区外に広がる。深さは、北東側の最も深い部分で約30cmあるが、南下する緩斜面にあるため、南西部では竪穴の掘り込みがほぼ失われている。床面中央東よりに炉1基がある。主柱穴5基を検出し、ほかに主柱穴の可能性のある土坑1基を調査区壁際で検出した。建物としては主柱6本を長六角形状に配し、中央に炉1基がある構造と復元できる。柱間は4～6mである。

主柱穴の規模は概ね9001竪穴建物と同様であるが、一部に根固めの石が良好に残る。柱を囲んで長径約20cmの円礫を5～6段積み重ねる。また、柱痕跡が残るものがあり、柱の直径は30cm前後と推定できる。竪穴内に4基の埋設土器があり、そのうち3基は主柱穴に近接する。1基は竪穴廃絶後に埋土の上面から、もう1基は床面上から掘り込まれているが、他の2基については掘り込み面が不明である。

9100竪穴建物埋土から出土した土器は、北白川上

層式が中心であり、それより遡る型式はみられない。

また、9100 大型竪穴建物の床面上と周囲には、無数の土坑や小穴があるが、多くは竪穴建物廃絶後に掘り込まれた遺構と考える。集石や立石を伴う土坑が多く、磨製石斧や切目石錘を埋納した小穴がある。竪穴建物外にも 2 基の埋設土器があるが、縄文時代晩期のもので、時期が下る。

9150 大型竪穴建物 主柱穴と炉は検出していない。検出範囲での東西長は約 12m あり、埋土の状況も似ることから 9001、9100 と同規模・同構造の遺構の可能性はある。埋土の上から、多くの土坑が掘り込まれる。

遺構の性格 大型竪穴建物の埋土から出土した土器群にはそれぞれ若干の時期差を含むため、遺構の変遷としては、東端の 9001 から 9100、9150 の順に西側に移動した可能性がある。しかし併存した時期がないとも断言できない。立地としては、東側は中谷川にむけて急峻な崖となるため、遺跡の東端に位置する。また低位段丘上でも最も丘陵に近い高所にあり、紀ノ川上流側も下流側も見渡すことができる。

縄文時代の大型建物は、主に前期～中期にかけて東日本に分布する。多くは長楕円形のロングハウスの形

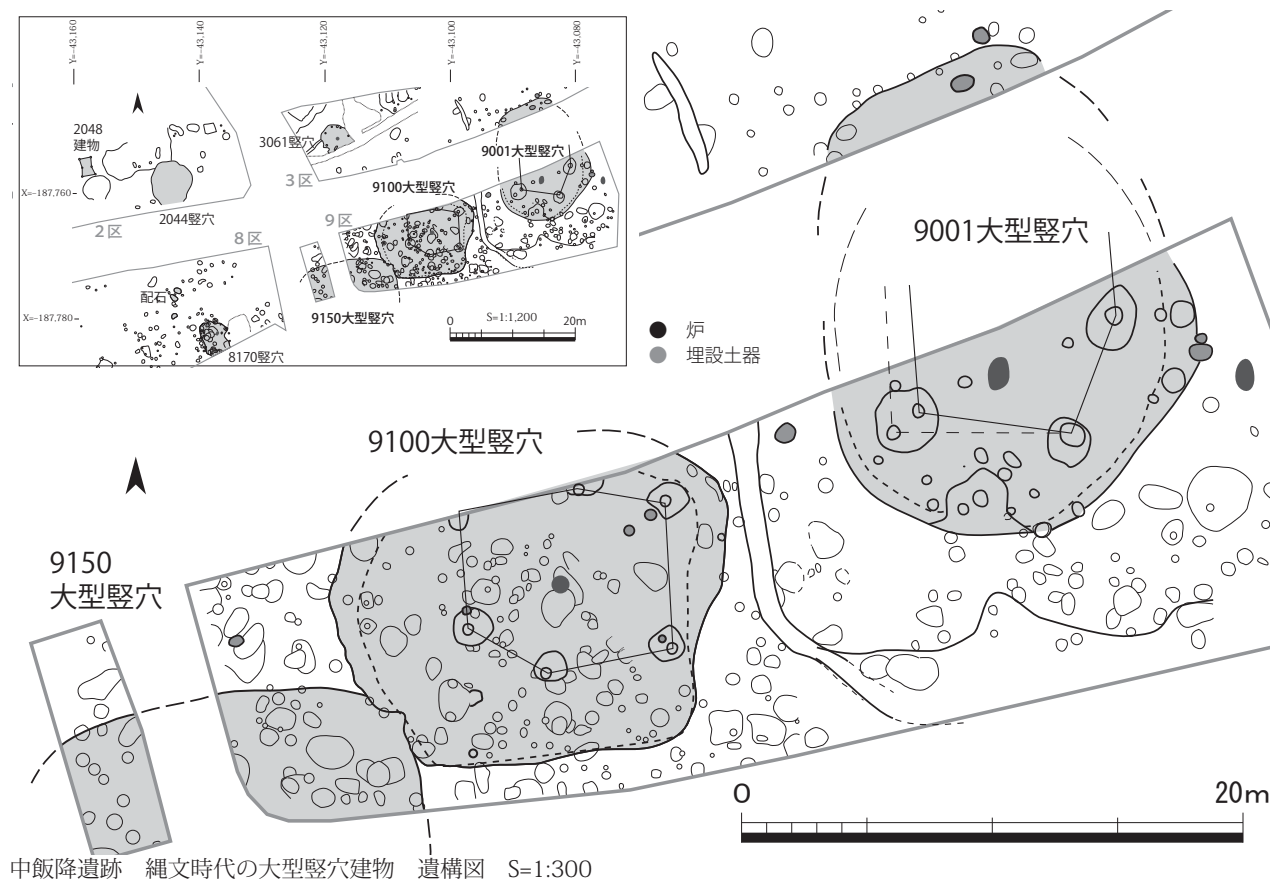
式をとり、各柱間に炉を 1 基ずつ配する。民族例などでも、こうしたロングハウスに集住する例がある。しかし、本遺跡例では構造が異なり、炉が 1 基のみであるため、集住の目的には向かないと考える。

また、縄文時代の晩期には、北陸を中心に環状木柱列が分布する。半裁した丸木を円形に配すもので、祭祀に関するとされる。本遺跡例の柱穴は、こうした木柱を垂直に建てるための構造にも似る。しかし、竪穴であり、炉がある点を考慮すると、やはり竪穴建物とするのが妥当と考える。内部空間を可能な限り広く確保するため、特殊な柱穴構造や間取りになったとすると、多数の人間が集う目的を想定できる。

全国的にも同様の類例が見当たらないため、遺構の性格を論じるのは難しい。立地や遺構の状況をふまえて提言すると、実的な性格をもちながら、象徴的に存在した建物であろうか。廃絶後にも、土器の埋設などの行為が繰り返され、長らく象徴的な場所としての意識が続いたことが窺える。 (富永里菜)

参考文献

芹沢長介・坪井清足監修『縄文土器大成』1981 講談社
戸沢充則編『縄文時代研究事典』1994 東京堂出版
小林達雄編『総覧 縄文土器』2008 UMプロモーション



[資料紹介]

丁ノ町・妙寺遺跡の弥生土器 ー弥生時代中期最後の土器群ー

概要：本稿では、丁ノ町・妙寺遺跡の調査で得られた弥生時代中期末葉の土器群を紹介した。土器群の編年的位置付けでは、紀伊の弥生時代中期末葉の新たな基準資料として位置付けられ、新たな紀伊Ⅳ－2様式の枠組みを提示した。また、丁ノ町・妙寺遺跡と隣接する西飯降Ⅱ遺跡との関係について述べた。

はじめに

平成18年度から平成20年度に行われた京奈和自動車道関連遺跡かつらぎ町丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査では、弥生時代中期の集落が発見され、多数の遺物が出土した。

これらの発掘調査のうち、西飯降Ⅱ遺跡では竪穴建物などの遺構が密集して検出され、紀ノ川中流域の大規模集落として評価が可能である（本文16～19P参照）。一方、西飯降Ⅱ遺跡の西側に位置する丁ノ町・妙寺遺跡では、弥生時代の竪穴建物が小規模ながら散見され、二つの集落の関係が注目される。

その中で今回紹介する資料は、平成19年度の丁ノ町・妙寺遺跡の調査で検出した、弥生時代中期の150流路出土土器である。これらの土器群は弥生時代中期末葉の時期様相を示し、類例の乏しい紀伊の中期末葉から後期初頭の土器を考える上で良好な一括資料となりうる。さらには、当遺跡の評価として焦点となる、西飯降Ⅱ遺跡の存続時期との関係を考える上で重要な

資料である。

今回は整理途中段階ではあるが、丁ノ町・妙寺遺跡の弥生時代中期末葉の土器群を紹介し、主に土器群の編年的位置付けと、そこから派生する丁ノ町・妙寺遺跡の評価と西飯降Ⅱ遺跡との関係について予察を述べる。

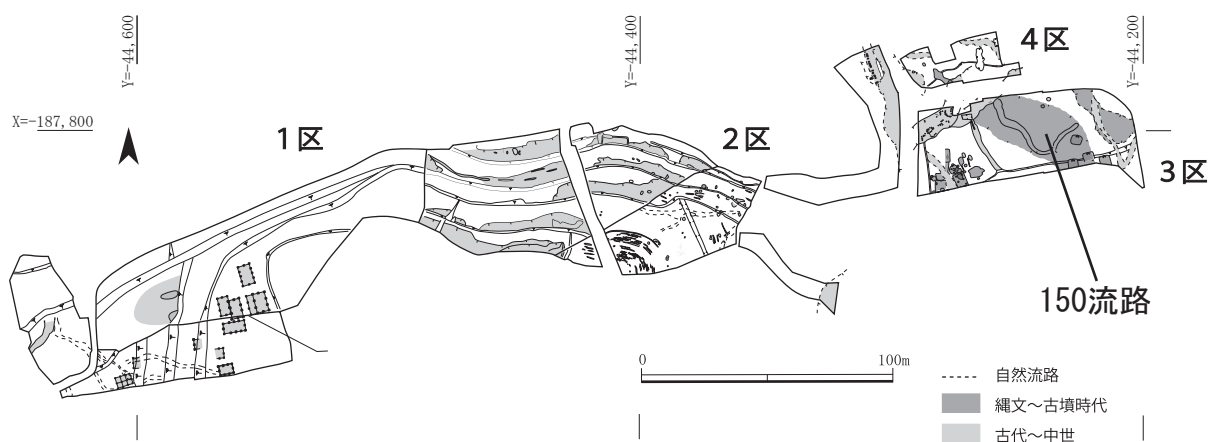
遺構の概要と出土状況

150流路は、平成19年度の丁ノ町・妙寺遺跡において調査区の東に位置する3区で検出した。北西から南東方向に流れ、幅約9m、深さ約1.6mを測る流路である。

流路は、弥生時代後期後半には完全に埋没していたと考えられる。流路中央に設けた東西セクションより北側と南側では、堆積状況が異なり、南側はやや深く落ち込む状況であったことがうかがえる。上層・中層での遺物の出土はごくわずかであり、最下層に対応する緑灰シルト層と流路の肩部下層にかけて土器が集中的に出土した。流路の東肩は調査区外となり不明瞭であるが、西肩に土器が集中的に出土することから、流路の西側から土



150流路北側遺物出土状況 北から



平成19年度 丁ノ町・妙寺遺跡調査遺構図 S=1:3000



150 流路遺物出土状況図 S=1:80

器や木製品が投棄されたものと考えられる。

また、東西セクションの北側と南側では土器の出土状況も異なり、北側では肩部に集中し、土器片が密集した状態で出土している。一方、南側では木製品・自然木等に伴い、完形に近い状態で土器が出土している。

流路という遺構の性格上、時期の取扱いに注意が必要であるが、出土状況からは比較的短時間に埋没したと考えられ、出土土器の廃棄の一括性は比較的高いものと考えられる。

出土土器の概要

150 流路からは、完形品も含め 300 個体以上の土器が出土している。今回はその中から代表的な土器を抽出し、資料の提示を行う。

壺には、広口壺(1～4)・有段口縁壺(5)・短頸壺などが見られる。広口壺は、頸部に凹線文を施す壺(1)や、口縁端部を上下に拡張し刺突文を施す壺(3)のほか、口縁端部を垂下させた無文の壺(2)が存在する。文様は櫛描文を施す器種がわずかに残るが、多くは刺突文や凹線文のみと文様が簡素になり、体部にタタキ目を残すもの(4)も存在する。

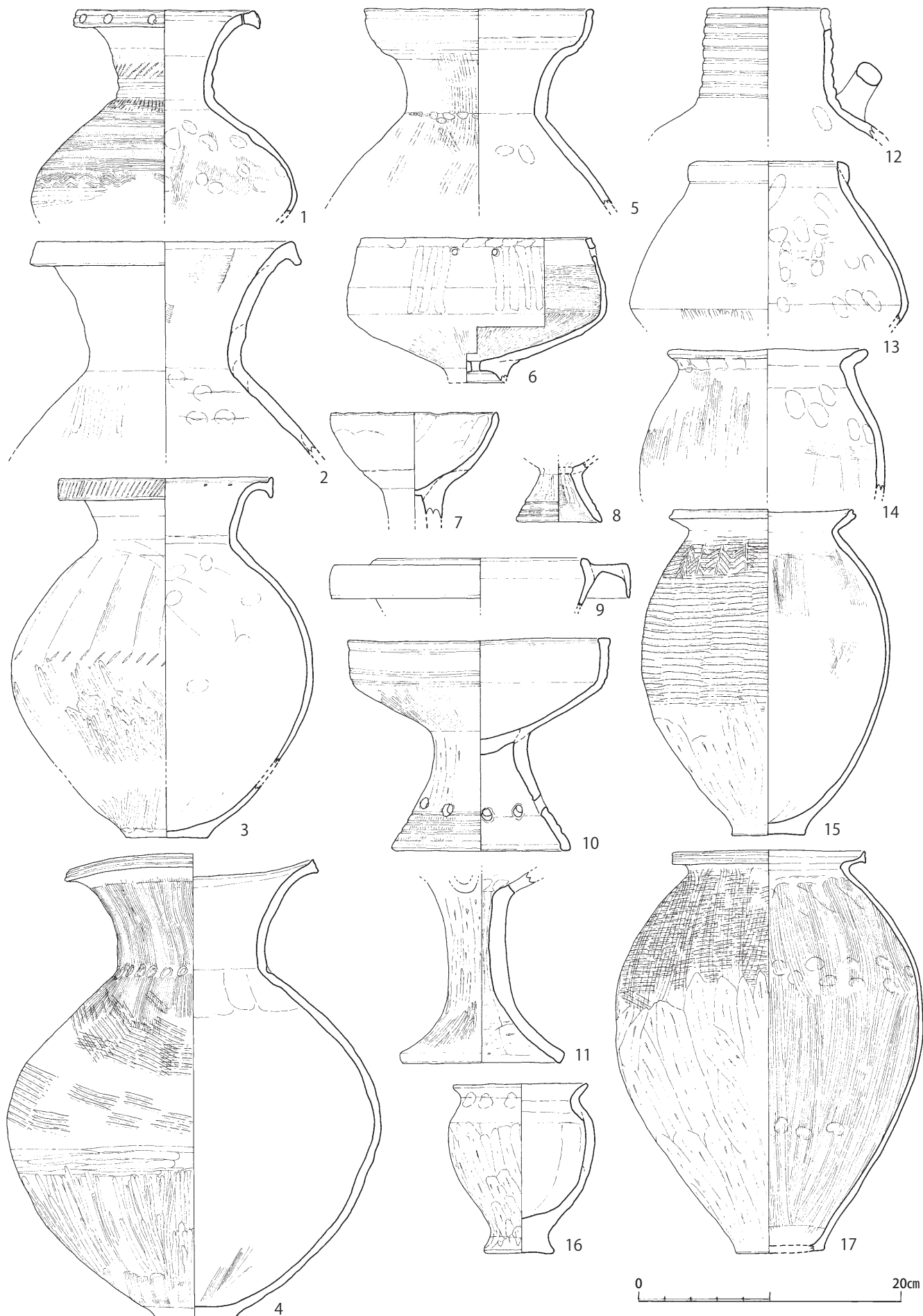
鉢(6)は紐通穴を持つもので、底部中央を穿孔する。高杯は杯部の形態が小型の椀形を呈するもの(7)、水

平口縁をもつもの(9)、やや口径が小さい鉢状の杯部をもつもの(10)が存在する。(10)の高杯の脚部は台付鉢などの台付土器と共通する短い脚部である。また、(8)はミニチュア土器の脚台部である。高杯脚部(11)は内面に絞り痕をもつもので、胎土や作りは粗く器壁は厚い。杯底部付近には把手状の剥離痕が見られる。水差(12)は口縁部に凹線を 8 条施す。無頸壺(13)は無文のものである。

甕は外面にタタキを残し、下半部をヘラケズリで仕上げるものが主体となる(17)。(15)は体部上半を水平タタキののちに、肩部に矢羽根状タタキを施す。甕の中には肩部に刺突文を施すものも存在する。小型の甕(16)は外面をヘラケズリしたものである。搬入土器には生駒山西麓産の甕(14)が存在する。器壁は厚く、口縁端部を摘み上げずに丸く終わるもので、体部上半までヘラミガキを行う。

編年的位置付けと紀伊Ⅳ－2 様式の再編

以上の 150 流路出土土器は全体的な特徴として、櫛描文を施文する個体が減少する一方、凹線文や刺突文のみを施す個体が増加する。文様から見れば、凹線文が主体となった段階であるといえる。また、直口壺や、細頸壺は当土器群の中には既に見られない。新た



150 流路出土弥生土器実測図 S=1:4

な器種としては、垂下口縁を持つ広口壺や短頸壺・無頸壺の増加、高杯の脚部が台付土器と共通するものが現れる点などが挙げられる。これらの資料について既往の紀伊の弥生土器編年に照らし合わせるならば、紀伊Ⅳ－１様式よりは新しい様相を持ち、紀伊Ⅳ－２様式に相当する（土井 1989）。

しかしながら、紀伊Ⅳ－２様式に提示された和歌山市滝ヶ峰遺跡や御坊市亀山遺跡の一部の資料と 150 流路出土土器には、大きな乖離がみられる。広口壺に見られる櫛描文の残存、凹線文の一定程度の施文、脚台付鉢の無文化、ハの字に開く脚部形態などの点から見れば時期差と捉えられる差異がみられるのである。紀伊Ⅳ－２様式の各資料については文中において土井氏も述べるように、土器量の少ない資料や表採資料の型式学的な操作により組み立てられており、資料不足の感は否めない。

さらに、紀伊Ⅳ－２様式の一部の資料は、新たな器種として口縁部が短く屈曲する短頸壺や、内面に絞り痕のない高杯脚部が出現している。文様からは櫛描文や凹線文が施されなくなった段階と位置付けられる。近年の河内・大和の土器の編年観から見れば、後期初頭に下る資料であろう（濱田 2001）。

一方、150 流路出土土器を大和の弥生土器編年に照らし合わせるならば、大和Ⅳ－２様式と極めて近い様相を示し（藤田 2003）、各地域との併行関係に大きな齟齬は見られないと考えられる。

このように、150 流路出土土器の編年的位置付けを行うならば、紀伊の弥生時代中期末葉の小様式として位置付けられる新たな土器群であろう。従来、紀伊Ⅳ－２様式については型式学的な操作によって設定されていたが、本一括資料をもって新たに紀伊Ⅳ－２様式を再編するべきである。これにより、続く紀伊Ⅴ－１様式についても、最古段階の位置付けに若干の変更が必要となる。

丁ノ町・妙寺遺跡と西飯降Ⅱ遺跡

丁ノ町・妙寺遺跡では 150 流路以外にも、平成 18 年度の調査で、当該期の土器棺墓や土坑・溝などが検出されており、遺跡の主な時期は弥生時代中期後半から、後期初頭にかけて継続したとみられる。

一方、西飯降Ⅱ遺跡については、現在その一部であ

る平成 18 年度調査分の整理作業を進めているが、その出土土器の内容を見る限り、西飯降Ⅱ遺跡は紀伊Ⅲ－２様式から紀伊Ⅳ－１様式の時間幅の中でその存続時期を終えると考えられる。

西飯降Ⅱ遺跡と同様に、和歌山市太田・黒田遺跡、和歌山市宇田森遺跡、海南市岡村遺跡など紀ノ川流域の大規模・中規模集落についても紀伊Ⅴ－１・２様式にはその集落を途絶させることはすでに指摘されている（前田 1991・土井 1994）。こうした変化に対応し、丘陵上には滝ヶ峰遺跡や和歌山市橘谷遺跡、有田市星尾山遺跡などの高地性集落が出現する。また、紀ノ川の中島に位置するかつらぎ町船岡山遺跡など、稲作に適さない河川の要衝地に位置する遺跡が後期初頭にかけて出現するのである。

従来、弥生時代中期末葉から後期初頭の集落動態の変化は、軍事的緊張関係や、気候変動による居住環境の変化の二つが考えられてきた。

しかし、丁ノ町・妙寺遺跡と西飯降Ⅱ遺跡はわずかな距離しか離れておらず、比高差も 10m 程度しかみられない。二つの集落の存続時期の違いからは、西飯降Ⅱ遺跡が解体し、隣接地である丁ノ町・妙寺遺跡への移動が起こったとみられる状況を示す。以上のようにみると、二つの集落の動向は、中期末葉から後期初頭への拠点集落の解体の一場面を示しているといえるのでないだろうか。弥生時代中期社会は決して一様な解体を見たわけではなく、集落ごとに多様な対応がみられた。その多様な解体は、弥生時代中期社会の崩壊と弥生時代後期社会の成立の背景を探る手がかりとなる。その実像については今後の検討課題としたい。（田中元浩）

※ 150 流路の弥生土器については、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、谷上真由美（立命館大学大学院）から有益なご教示をいただいた。

参考文献

- 土井孝之 1989 「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社
- 1994 「紀伊の弥生時代集落の動向と高地性集落」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 前田敬彦 1991 「紀伊における弥生時代集落と銅鐸」『古代文化』第 47 巻第 10 号（財）古代学協会
- 濱田延充 2001 「畿内第Ⅳ様式の実像―西ノ辻 N 地点出土土器の再検討―」『ヒストリア』第 174 号 大阪歴史学会
- 藤田三郎 2003 「(4) 大和第Ⅳ様式」『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所

金剛三昧院客殿「持仏の間」の変遷

変遷の概要

客殿の中央に配される持仏の間では、柱の不陸や建て起こしといった、軸組の修理に伴う柱間装置や仏壇の解体において、度重なる改変を受けて来たことが判明した。

現在は3間四方の平面とされるが、当初は南北に二分されており、梁間方向の中央部に柱および半柱を1間ごとに建て、柱間は豎板壁で間仕切り、南半はその板壁を来迎壁とした仏間、北半はさらに東西1間ごとに間仕切って3室を並べる。方丈建築における眠蔵を思わせる平面構成である。その時期の天井構成が現在も残っている(写真)。その後、仏壇が段階的に拡張され、それに伴い西面の柱間装置も改変されていく。

近代に入ると、梁間中央の柱2本を根太天端および蟻壁長押下にて切断し、その蟻壁長押下へ梁を架けて天井を支持し、切断した柱や半柱ごと仏壇が北側へ移設されて、およそ現状の平面構成になる。仏壇の北側は会奥および会中からの押入となる。襖や張付壁の下張りに見られる年代などから、この改変が明治末期から大正初期にかけての施工と判断でき、大正4年(1915)の高野山開創1100年の記念法会に合わせた整備と考える。続く昭和9年(1934)の1100年御遠忌に合わせた整備では、会奥南面西間の押入が押板床へと改変され、現在に至る。

以下に、各時期の改変内容について、順を追って見ていく。

当初(17世紀中葉・寛永末年頃)

持仏の間は北面に須弥壇を構え、その須弥壇は西面に折れ曲がって続き、脇壇となる。須弥壇後壁は張付壁となる。

持仏の間の北側は東西3室に区切られる。東室は内法以下を片袖壁、片引き戸で更に南北に仕切る。中央室は東面が片引き戸の構え、西面が豎板壁、北面は板戸引き違い。この板戸の会奥側には障壁画を張り付けたと推定する。西室は北面と西面の北側1間が襖引き違い、西面南側の半間が片引き戸となる。

第1次改変期：中央間仏壇新設(17世紀末・元禄頃)

北面須弥壇中央間の後壁を後方へ広げ、仏壇を新

設する。北側中央室東面の片引き戸の構えでは戸が撤去され、開放となる。また、北側東室の東面南半間に、土室の間側から使う仏壇が新設される。

第2次改変期：両脇間仏壇新設(18世紀後半・宝暦～安永頃)

北面須弥壇東間および西間の後壁を後方へ広げ、脇仏壇を新設する。この改変に伴い、西室西面南側の片引き戸構えを張付壁に変更する。上段・次の間境の建具撤去、上段・次の間の障壁画の制作もこの時期と推定する。

東室東面の仏壇が南側から北へ移り、北面は板壁に変更される。中央室北面の建具が襖に替わったのもこの頃と推定する。

持仏の間の床は二重床に造って敷居上端位置まで上げる。それに伴って正面の敷居に板の取り合い仕口を造り、須弥壇下框は高さの小さな材に取替え、不要となった飾り金具は切り縮めて脇仏壇の框に転用する。

第3次改変期：西側須弥壇短縮、東室仏壇改変など(江戸後期～明治初期)

持仏の間の南から半間の位置に仕切りを設けて南北に区切る。建具は障子6枚建て、南側半間は畳敷きと推定する。この仕切りの新設に伴い、西の脇壇は切り縮められ、西面南側1間の張付壁は襖引き違いに変わる。

東室では東面を開放、北面を襖引き違い、西面を豎板壁に改変する。東側には土室の間側から使う置き仏壇のようなものを置いたと推定する。

西室では西面に3段の棚を新設し、これに伴い、間仕切りを襖引き違いから張付壁に変更する。

第4次改変期：仏壇移設(大正初期)

開創1100年記念法会に合わせた整備で、須弥壇と仏壇が北へ1m程移動する。この時仏壇の奥行きは拡張、須弥壇の奥行きは縮小され、脇壇は廃される。上記に伴い、北側の3室は無くなり、会奥および会中側からの押入となる。

持仏の間南から半間位置の間仕切りを半間北へ移動し、南側1間は畳敷き、北側須弥壇前は床組を組み替え、中央を拭い板、両脇に畳を1枚ずつ置く。

第5次改変期(現状)：会奥床の間新設(昭和初期)

1100年御遠忌に合わせた整備で、正面から1間

目の仕切りが撤去され、敷居だけが残る。東面南より第一間の内障子が撤去されたのもこの頃と推定。

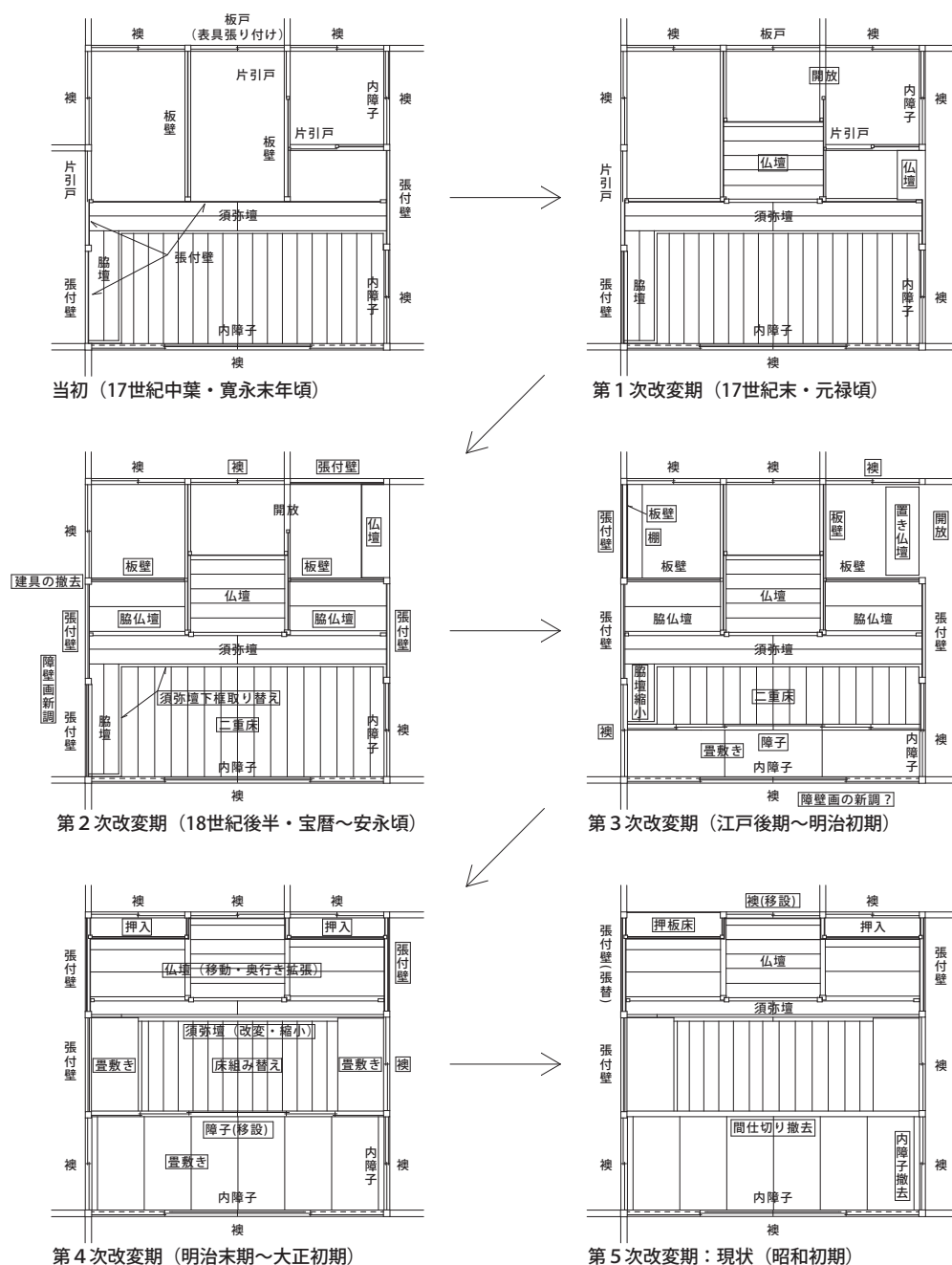
背面西端間を会奥側からの押し板床に変更する。上記に伴い、襖が中央間へ移され、中央間の襖は会奥・会中境に移される。

まとめ

以上の様に、金剛三昧院「持仏の間」では、客殿における持仏の間とその北側3室の在り方の変遷を追うことができ、高野山内での客殿建築の成立過程を辿る上でも貴重な資料と言える。（下津健太郎）



持仏の間の天井構成 南から



持仏の間の平面変遷（四角囲み文字は改変箇所を示す）

機械縫い畳床の製作記録

平成 20 年度に受託した未指定文化財建造物等修理業務のなかで、茶室と味噌部屋の畳の製作を行った。茶室については 4 畳半の茶室と 3 畳の水屋、味噌部屋については 4 畳半の西側部屋に敷き込む畳である。近年、畳床はポリスチレンフォームやタタミボード(木製繊維板)を心材として上下を藁で挟んだものや、藁を使わず建材のみで構成されるものが流通している。表と縁を付けて敷いてしまえば見えなくなるが、本工事では本物の藁床を敷き込みたいと考えた。昔風の柔軟性と適度な硬さを持たせたいという思いと、旧来通りに復旧した建物の敷居の高さに合わせた畳が必要であることから、今回この畳製作工事では紀州産の藁を使った畳床を和歌山県有田郡有田川町の畳店で特注で製作した。5 段配の機械縫いで製作したので、手順を紹介する。

①藁菰を敷く

裏菰ともいう。菰はナイロン製の糸を使用した豊岡産のものを採用した。幅は 1.06m(3 尺 5 寸)、長さは 20 畳分がロール状になって販売されている。これを製畳機の上に敷き、以後の作業はこの製畳機の上で進めていく。

②下配を並べる

長手方向に平行に藁を重ねていく。まず藁の根元が両端部分に来よう配し、その後は一方の方向にずらしながら順に重ねていく。計 6 列重ねる。これ以降の手順で使用する藁は長さが約 758mm(2 尺 5 寸)、紀の川市打田町産のものである。

③切藁を並べる

短く切った藁を載せていく。まずは長手方向の両端、框方向の両端、そして中央に載せていく。片手で床を押さえて厚みを確認しながら、もう一方の手で均等に切藁を散らしていく。この際、仕上がり時に角が丸くなるのを防ぐため、端は中央よりも少し多めに切藁を載せて高くする。

④胴藁を並べる

大手配ともいう。框方向に平行に藁を重ねていく。両端に根元を置き、先を中央に向けて並べる。



①藁菰を敷く



②下配を並べる



③切藁を並べる



④胴藁を並べる

⑤縦配を並べる

長手方向に平行に藁を重ねていく。下配と同様に、まず藁の根元が両框部分に来るよう配し、下配と同方向にずらしながら順に重ねていく。計6列重ねる。

⑥横手配を並べる

胴藁と同様、框方向に平行に藁を重ねていく。両端に根元を置き、先が中央に向かうよう並べる。

⑦上配を並べる

長手方向に平行に藁を重ねていく。まず藁の根元が両框部分に来るよう配し、その後は下配と反対方向にずらしながら順に重ねていく。計7列重ねる。両框部分は藁を少し多くする。上配を完了した時点で、全体の厚みは約280mm(9寸2分)、ここまでの作業時間はおよそ1時間であった。

⑧縫う

①～⑦で積み重ねてきた藁を製畳機で縫っていく。今回使用した『サカエ式製畳機 E型』は、戦後間もない頃の製造とされる古い機械である。まずは縫い始めの框部分を製畳機に挟んで仕上がり厚さに圧縮する。今回製作する畳は、表と縁を取り付けた最終の仕上がり厚さが52mm(1寸7分)であるので、45mm(1寸5分)に圧縮した。糸をセットしたら製畳機を作動させ、ローラーで送りながら圧縮、縫い、裁断を同時に行う。縫いの動作はまず、下糸を持った針を上を刺し、上に出てきた下糸の輪の中を上糸を持った針が往復し、下糸を締める。上糸の送りは縫い始めと終わりの7列が12mm(4分)、その他は30mm(1寸)で、下糸のピッチは両端3列が15mm(5分)、その他は30mm(1寸)で縫い進めた。縫い糸は上下共にナイロン製の糸を使用したが、上糸は往復するので一列に2本通っていることと、下糸で床を締め付けることから、下糸は上糸よりも強度の高いものを採用した。裁断については幅が985mm(3尺2寸5分)の位置に包丁がついており、それが上下することによって裁断されていく。送りの方向に長さ1909mm(6尺3寸)のものさしをあて、長さを確認して機械を停止する。以上で畳床は完成である。

この後、部屋の寸法に合わせて裁断し、畳表と縁を付けて仕上がりとなる。(増野真衣)



⑤縦配を並べる



⑥横手配を並べる



⑦上配を並べる



⑧縫う

平成 20(2008)年度の 普及活動を振り返って

- 速報展 「紀州の歩み」
 報告会 「地宝のひびき」
 「歴史研究シリーズⅣ 現代によみがえる古代の遺跡」
 「岩陰と古墳—海辺に葬られた人々—」
 「縄文時代の実像に迫る—大型竪穴住居の発見によせて—」
 「京奈和自動車道関連遺跡調査報告会」
 発掘調査現地説明会 田辺城下町遺跡、中飯降遺跡、
 西飯降Ⅱ遺跡、水軒堤防、北山
 廃寺・北山三嶋遺跡
 考古学出前授業 和歌山市立川永小学校

平成 20 年度普及活動の概要

当センターの文化財調査成果が地域学習などに活用され、文化財の普及・啓発につながることを意図して活動を行っている。例年、年度初めに実施している速報展「紀州の歩み」を皮切りに文化財調査報告会、シンポジウム、発掘調査現場や保存修理現場の見学会、学校への出前授業を行った。

埋蔵文化財に関する普及活動

埋蔵文化財に対する理解と知識と認識が深まることを期待して考古資料の展示、文化財講座、シンポジウム、機に応じた現地説明会・現地公開を開催した。

「紀州の歩み」速報展 5月12日～6月30日

平成 18 年度から大規模に調査を実施している丁ノ町・妙寺遺跡、西飯降Ⅱ遺跡の出土品を中心に展示を行い、期間中、展示解説と関連講座として「回顧 2007 考古学調査」を行った。 …①



①「紀州の歩み」



②「地宝のひびき」

「地宝のひびき」—第 3 回和歌山県内文化財調査報告会— 7月20日

当センター主催で県内の文化財調査・建造物修理の報告会を市町村等の担当者との合同で開催している。情報を共有するとともに県民に文化財への理解と認識を深めていただくことを目的に実施している。 …②

「歴史研究シリーズⅣ 現代によみがえる古代の遺跡」 8月23日

(社)和歌山県文化財研究会と共催で、発掘中の中飯降遺跡の現地見学と「現代によみがえる古代の遺跡」と題し講演を行った。

公開シンポジウム「岩陰と古墳—海辺に葬られた人々—」 10月4日

公開シンポジウムは著名な磯間岩陰遺跡が存在する田辺市において、立命館大学和田晴吾先生をお招きして、当センター若手技師、田辺市、白浜町の担当者を中心に開催した。紀南地方において初めての試みであったが県内のみならず島根県、愛知県からも参加いただきテーマに対する関心の高さをうかがわせた。 …③



③「岩陰と古墳—海辺に葬られた人々—」



④「縄文時代の実像に迫る」

「縄文時代の実像に迫る一大型竪穴住居の発見によって」 10月19日

かつらぎ町教育委員会と共催でかつらぎ総合文化館において京都大学泉拓良先生をお招きし、7月に発見された大型住居をテーマに開催した。中飯降遺跡は現説を含め2回目の登場であったが会場は満席となり地元の方の関心の高さを改めて知ることとなった。…④

県立紀伊風土記の丘冬季企画展関連講座 2月28日
多くの方が熱心に聴講され、展示内容を通しての話しでは非常に熱い眼差しを感じる雰囲気であった。

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査報告会 3月21日
昨年に引き続き、中飯降遺跡、西飯降Ⅱ遺跡の報告会を開催した。合わせて「京奈和自動車道関連遺跡調査報告会関連遺物展示」を3月3日～3月21日まで実施した。…⑤

出前授業 6月3日

「発掘調査からわかる川永の歴史と祖先の暮らし」をテーマに和歌山市川永小学校で出前授業を行った。



⑤「京奈和自動車道関連遺跡調査報告会」



⑥中飯降遺跡



⑦県指定史跡水軒堤防

発掘調査現地説明会・現地公開

調査を行ったうちの5遺跡において7回開催した。

田辺城下町遺跡	8月13日
中飯降遺跡	7月26日・1月11日…⑥
県指定史跡水軒堤防	10月11日・2月14日…⑦
西飯降Ⅱ遺跡	2月7日
北山廃寺・北山三嶋遺跡	2月21日

総括

当センターが以前にも増して普及活動に力を入れ出して3年が経過する。その成果もあってか当センターの存在、普及活動がある程度認知されるようになってきた。

現地説明会などを開催すると最近、参加者が以前に比べ増えているのではと感じていたが、次頁表の普及事業の参加者内訳を参照すると、中高年の方の参加が多くなっていることに気付く。これまで日本の高度成長を担ってきた世代である。この世代の方々が文化財に目を向けてくれていることに対し、現状に甘んじることなく、さらなる進化を図るとともにニーズに答えていかねばならないと考えている。

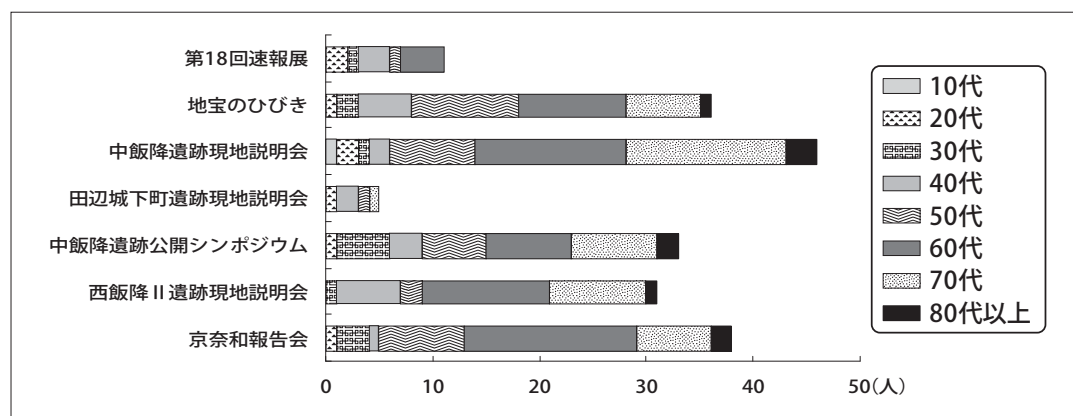
平成 20(2008)年度の主要な普及活動一覧(埋蔵文化財課関係)

	活動名称	開催日時・期間	場 所	参加人数
1	紀州の歩み	平成 20 年 5 月 12 日(月) ～ 6 月 30 日(月)	きのくに歴史探訪館	60 名
2	関連講座「回顧 2007 考古学調査」	平成 20 年 5 月 17 日(土)	きのくに歴史探訪館	10 名
3	出前授業(川永小学校 6 年生授業) 「発掘調査からわかる川永の歴史と祖先の暮らし」	平成 20 年 6 月 3 日(火)	和歌山市立川永小学校	—
4	地宝のひびき —第 3 回和歌山県内文化財調査報告会—	平成 20 年 7 月 20 日(日)	和歌山県立図書館きのくに志学館	67 名
5	中飯降遺跡現地説明会	平成 20 年 7 月 26 日(土)	かつらぎ町中飯降	220 名
6	第 1 回文化財講座・歴史研究シリーズⅣ 「現代によみがえる古代の遺跡」	平成 20 年 8 月 23 日(土)	かつらぎ町中飯降	34 名
7	田辺城下町遺跡現地説明会	平成 20 年 8 月 13 日(水)	田辺市南新町	18 名
8	関西考古学の日スタンプラリー	平成 20 年 9 月 3 日(水) ～ 11 月 30 日(日)	かつらぎ町中飯降・西飯降	—
9	公開シンポジウム 「岩陰と古墳—海辺に葬られた人々—」	平成 20 年 10 月 4 日(土)	和歌山県立情報交流センター BIG・U	81 名
10	かつらぎ町中飯降遺跡 公開シンポジウム 「縄文時代の実像に迫る—大型竪穴住居の発見によせて—」	平成 20 年 10 月 19 日(日)	かつらぎ総合文化会館会議室	69 名
11	県指定史跡水軒堤防現地説明会	平成 20 年 10 月 11 日(土)	和歌山市西浜	120 名
12	歩いて知る紀の国歴史探訪「～根来寺～」	平成 20 年 10 月 25 日(土)	岩出市根来	24 名
13	中飯降遺跡現地一般公開	平成 20 年 1 月 11 日(日)	かつらぎ町中飯降	120 名
14	県立紀伊風土記の丘冬期企画展「紀ノ川流域 の考古学・民俗学」第 1 部 「鹿の描かれた時代～紀ノ川流域の弥生時代～」	平成 21 年 1 月 24 日(土) ～ 3 月 15 日(日)	和歌山県立紀伊風土記の丘	—
15	西飯降Ⅱ遺跡現地説明会	平成 21 年 2 月 7 日(土)	かつらぎ町西飯降	256 名
16	県指定史跡水軒堤防現地公開	平成 21 年 2 月 14 日(土)	和歌山市西浜	18 名
17	北山廃寺・北山三嶋遺跡現地説明会	平成 21 年 2 月 21 日(土)	紀ノ川市貴志川町北山	101 名
18	県立紀伊風土記の丘冬期企画展関連講座 「紀ノ川流域の弥生時代を掘る」	平成 21 年 2 月 28 日(土)	和歌山県立紀伊風土記の丘	25 名
19	京奈和自動車道関連遺跡発掘調査報告会	平成 21 年 3 月 21 日(土)	かつらぎ総合文化会館	61 名
20	京奈和自動車道関連遺跡発掘調査報告会関連 遺物展示	平成 21 年 3 月 3 日(火) ～ 3 月 21 日(土)	かつらぎ総合文化会館展示ホール	—

* 第 1 回文化財講座・歴史研究シリーズⅣは、社団法人和歌山県文化財研究会との共催

* かつらぎ町中飯降遺跡 公開シンポジウム、京奈和自動車道関連遺跡発掘調査報告会は、当センター主催・かつらぎ町教育委員会と共催

* 県立紀伊風土記の丘冬期企画展・企画展関連講座は、県立紀伊風土記の丘主催・当センター共催



2008 年度普及活動参加者内訳

(富加見泰彦・田中元浩・手島芙実子)

文化財建造物に関する普及活動

「星林高校 ふるさと教育(和歌浦探訪)」における 実地授業

和歌山県立星林高等学校では、国際交流科1年生を対象にした「ふるさと教育」を実施している。身近にある歴史的地域について学習することを通して、ふるさと和歌山を愛し、ひいては自国の文化に愛着と誇りを持つことを目的としての取り組みとのことである。第2回目の今回は和歌浦周辺での現地体験学習を行うにあたり、当センターも講師として参加した。

当日は学生40名を、玉津島神社周辺の万葉歌碑を中心に探索する文学班、現地探索を通じて古い建築物、彫刻、美術等を学ぶ文化財班、紀州東照宮や不老橋周辺などを探索しながら和歌浦の歴史を学ぶ歴史班、の3班に分け、班ごとに分かれての学習とされた。

上記3班のうち、当センターでは文化財班を担当し(歴史班は当センター評議員の立花秀浩氏が講師を担当された)、天満神社、東照宮などを見学した。天満神社では、普段立ち入ることの出来ない瑞垣の中へ入って、本殿を飾る彫刻や彩色を間近に見て貰い、それらの様式や技法、時代的特色などについて説明した。学生たちも安土桃山時代の雰囲気を感じてくれている様にした。

身近にある文化財建造物でもこのような機会が無ければ間近に見ていただくことは難しい。今回の体験が学生たちの心にどう留まったか、体験学習の趣旨にもある「郷土愛」を深めるきっかけとなってくれることを期待する。

(鳴海祥博)



天満神社での実地授業

県指定文化財十禅律院本堂修理現場

平成21年2月7日、和歌山県教育委員会、紀の川市教育委員会、(財)和歌山県文化財保護協会との共催で『見て知る伝統技術』が開催された。今回は国指定名勝粉河寺庭園の発掘調査成果報告とあわせ、十禅律院において現在修理事業を進めている本堂のほか、庫裏などの県指定文化財建物内部や庭園の見学会が行われた。

毎年恒例のイベントとして楽しみにされている方も多く、2月とは思えない陽気に恵まれた当日は、参加者が80名を超える盛況さであった。このため、できる限りゆったりと文化財に触れられるよう考慮して、粉河寺と十禅律院の二班に分かれて、入れ替え制で解説を行った。

粉河寺の東北奥にある十禅律院は、江戸時代後期に創建された寺院である。「竜宮造り」とも呼ばれる印象的な塗上門をくぐると、正面に現在屋根を修理中の本堂が位置し、その両脇手前に庫裏と護摩堂が配される。これらはいずれも紀州藩主にゆかりのある建物で、和歌山県の文化財に指定されている。

特に、庫裏は同時期の紀州藩の御殿建築などと同様の特徴を有する大規模な建物で、壁や天井が唐紙で表具された格式の高い部屋内部から「洗心庭」を介し、近隣の山並みを借景する壮大な景観には、多くの参加者から感嘆の声があがった。十禅律院の中に入ったのは初めてという近在の参加者も多く、住職による解説も含め、地域の歴史を広く紹介する良い機会となった。

(多井忠嗣)



十禅律院庫裏内部見学会の様子

(財)和歌山県文化財センター平成 20(2008)年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	11 件	文化財建造物保存修理設計監理業務等	12 件
埋蔵文化財出土遺物等整理受託業務	2 件		

II 理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会・評議員会	20.05.27	アバローム紀の国
理事会・評議員会	21.03.27	アバローム紀の国

調査委員会

平成 20 年度 第 1 回調査委員会	20.07.16・07.17	京奈和自動車道(紀北東道路)遺跡発掘調査
平成 20 年度 第 2 回調査委員会	20.10.14・10.15	県指定史跡水軒堤防・京奈和自動車道(紀北東道路)出土遺物整理

現地調査指導

大野 薫 (財)大阪府文化財センター	20.07.07	京奈和自動車道(紀北東道路)中飯降遺跡
中村貞史 元和歌山県立紀伊風土記の丘	20.07.09	京奈和自動車道(紀北東道路)中飯降遺跡
泉 拓良 京都大学大学院	20.07.13	京奈和自動車道(紀北東道路)中飯降遺跡
矢野健一 立命館大学	20.07.23	京奈和自動車道(紀北東道路)中飯降遺跡
森 郁夫 帝塚山大学	21.02.16	北山廃寺・北山三嶋遺跡

全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係

平成 20 年度 第 1 回 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(松田・酒部)	20.05.15・05.16	(於：東京都)
第 29 回 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(酒部・村田)	20.06.12・06.13	主催：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
平成 20 年度 第 1 回 近畿地区 OA 委員会(富永)	20.06.20	主催：(財)枚方市文化財研究調査会
平成 20 年度 第 1 回(第 37 回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(村田)	20.07.18	主催：(財)枚方市文化財研究調査会
平成 20 年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(松尾・岩井)	20.10.09・10.10	主催：(財)かながわ考古学財団
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 第 14 回近畿ブロック埋蔵文化財研修会	20.10.24	テーマ「生産の考古学」(内田・富永) 主催：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
平成 20 年度 第 2 回 近畿地区 OA 委員会(富永)	20.11.14	主催：(財)大阪市文化財協会
平成 20 年度 第 2 回 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(村田・松尾)	20.12.02・12.03	(於：東京都)
「関西考古学の日」担当者会議(村田)	21.01.15	主催：(財)大阪市文化財協会
平成 20 年度 第 3 回 近畿地区 OA 委員会(富永)	21.02.13	主催：(財)枚方市文化財研究調査会
平成 20 年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(酒部・村田)	21.02.20	主催：(財)和歌山県文化財センター

平成20年度 第2回(第38回)全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(村田)	21.02.27	主催：(財)八尾市文化財調査研究会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当国会議(松尾)	21.03.06	主催：(財)元興寺文化財研究所

埋蔵文化財課関係

公共土木工事積算実務講習会(田中)	20.09.05	(於：大阪府)
平成20年度 水中文化遺産担当者協議会(村田)	20.12.13~12.16	主催：NPO法人文化財保存支援機構、松浦市教育委員会
平成20年度 和歌山県記念物・埋蔵文化財担当者会議(井石・田中)	20.12.15	主催：和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課

文化財建造物課関係

重要文化財建造物保存修理事業等監督者会議(鳴海)	20.04.14	主催：文化庁
文化財建造物保存事業幹部技術者研修会(鳴海)	20.04.15	主催：(財)文化財建造物保存技術協会
文化財建造物修理主任技術者講習会(上級コース)(多井)	20.08.21~08.29	主催：文化庁
文化財建造物保存技術者養成研修(第1回)(結城)	20.09.01~09.12	主催：(財)文化財建造物保存技術協会
文化財建造物保存修理関係者等連絡協議会(鳴海・多井・山本・御船)	20.10.14	主催：文化庁
文化財建造物保存事業主任技術者研修会(鳴海・多井・山本・御船)	20.10.15・10.16	主催：(財)文化財建造物保存技術協会
文化財建造物保存技術者養成研修(第2回)(結城)	20.10.20~10.31	主催：(財)文化財建造物保存技術協会
文化財建造物保存技術者養成研修(第3回)(結城)	20.12.01~12.12	主催：(財)文化財建造物保存技術協会
文化財建造物保存技術者養成研修(第4回)(結城)	21.01.26~02.06	主催：(財)文化財建造物保存技術協会

委員委嘱

和歌山県近代和風建築総合調査委員会(第1回)(山本)	20.05.29	和歌山県民文化会館
和歌山県近代和風建築総合調査委員会(第2回)(山本)	20.07.11	和歌山県民文化会館
和歌山県近代和風建築総合調査委員会(第3回)(山本)	20.08.11	和歌山県民文化会館
和歌山県近代和風建築総合調査委員会(第4回)(山本)	20.11.19	和歌山県庁南別館

III 講師派遣・執筆など

[講師派遣等]

埋蔵文化財課関係

富加見泰彦	紀伊考古学研究会第1回例会「西飯降Ⅱ遺跡の発掘調査」	20.04.20	和歌山市立博物館	参加者 18名
田中元浩	紀伊考古学研究会第1回例会「丁ノ町・妙寺遺跡の調査成果」	20.04.20	和歌山市立博物館	参加者 18名
井石好裕	紀伊考古学研究会第2回例会「岩出市の弥生遺跡「荒田遺跡」一和歌山県文化財センター調査区」	20.05.24	和歌山市立博物館	参加者 12名
土井孝之	紀伊考古学研究会第2回例会「弥生集落内での「時期的移動」について若干」	20.05.24	和歌山市立博物館	参加者 12名
佐々木宏治	水軒の浜に松を植える会『水軒の浜シンポジウム』(平成20年度紀の国森づくり基金活用事業)「水軒堤防の発掘調査」	20.07.21	和歌山市立西浜中学校	
土井孝之	市立五條文化博物館 夏季博物館講座「考古学にみる紀伊一大和 中間地域の文化形成」一和歌山側から見た五條文化一	20.08.10	市立五條文化博物館	参加者 27名
村田 弘	社団法人和歌山県文化財研究会 平成20年度第1回文化財講座 歴史研究シリーズIV「現代によみがえる古代の遺跡」			

—京奈和自動車道建設に伴う調査から— 20.08.23 かつらぎ総合文化会館 参加者 34 名

内田好昭・富永里菜 和歌山県教育委員会・九度山町教育委員会 平成 20 年度あなたが文化の伝承者「文化遺産塾」「京奈和道路の遺跡発掘調査について」きのくに県民カレッジ登録講座 20.09.13 九度山町立紙遊苑 参加者 15 名

佐々木宏治 テレビ和歌山 はばたく紀の国「県指定文化財 名勝・史跡「和歌の浦」と史跡「水軒堤防」」 20.10.19 テレビ和歌山

村田 弘・富永里菜 和歌山放送ラジオ「中飯降遺跡 大型建物のはなし」 20.11.11 和歌山放送

土井孝之 高石市婦人団体協議会・生活環境部会 古代遺跡探訪・チョット学んで見ては「遺跡発掘調査のイロハ〜」 20.11.18 高石市役所 参加者 40 名

川崎雅史 紀南文化財研究会 研究例会「田辺城下町遺跡の発掘調査」 20.11.24 田辺市青少年研修センター

村田 弘 冬期企画展の解説 第 7 回風土記講座「紀ノ川流域の弥生時代を掘る」 21.02.28 和歌山県立紀伊風土記の丘 参加者 25 名

田中元浩 寝屋川市教育委員会『寝屋川市歴史シンポジウム 古墳出現前夜の北河内—寝屋南遺跡の弥生時代のムラを考える—』「古墳時代へと変わる土器」 21.03.20 寝屋川市立エスポアル

文化財建造物課関係

鳴海祥博	全文連文化財保護研修会「高野山の文化財建造物」	20.04.24	金剛三昧院
山本新平	社寺建造物美術評議会研修事業開講式	20.06.06	南禅寺順正
鳴海祥博	文化財屋根技能士養成研修	20.08.27・08.28	高野山
山本新平	公民館生涯学習講座「歴史講座 太地町の町並み」	20.11.06・11.07	太地町公民館
鳴海祥博	ベトナム国「文化遺産の保全と活用」	21.03.05・03.06	高野山

【執筆等（個人研究を含む）】

埋蔵文化財課関係

田中元浩 「庄内形甕の地域性—播磨地域の検討から—」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集 和田晴吾先生還暦記念論集刊行会 20.05

川崎雅史 【縄文～弥生時代の移行期】発表Ⅱ「土器からみた弥生時代の始まり—突帯文土器の行方—」『時代の移行期を考える』紀伊考古学研究会 第 11 回大会 20.11.01

田中元浩 【弥生～古墳時代の移行期】発表Ⅲ「土器様式の変化と時代区分—紀ノ川下流域の古墳時代初頭を考えるために—」『時代の移行期を考える』紀伊考古学研究会 第 11 回大会 20.11.01

村田 弘 「中飯降遺跡の調査状況」『文化遺産課だより』平成 20 年 12 月号 和歌山県教育庁文化遺産課 20.12.24

田中元浩 「古墳時代へと変わる土器」『寝屋川市歴史シンポジウム 古墳出現前夜の北河内』寝屋川市教育委員会 21.03.20

文化財建造物課関係

鳴海祥博 「応其と根来大工」『特別展 没後四〇〇年 木食応其—秀吉から高野山を救った僧—』和歌山県立博物館 20.10.18

山本新平・神吉紀世子・山崎義人 「西伊豆沿岸漁村にみる太平洋沿岸ペンキ塗り住宅群の成立時期に関する考察」『住宅系研究報告会論文集』3 第 3 回住宅系研究報告会（2008）社団法人日本建築学会 20.12

鳴海祥博 「和歌浦天満宮の建築」『和歌浦天満宮の世界』和歌山大学フィールドミュージアム叢書② 和歌山大学紀州経済史文化史研究所編 清文堂 21.01.20

IV 保管遺物・記録資料の貸し出し・掲載依頼等

「慈尊院Ⅱ遺跡 竪穴住居跡（4×5 モノクロネガ）」

『改訂 九度山町史』通史編（2009 年 3 月発刊予定）掲載のため 九度山町史編纂委員会 20.06.09 付依頼

「中国陶磁器」『根来寺坊院跡』（財）和歌山県文化財センター編集・和歌山県教育委員会発行 1994 年 巻頭 7

「備前焼」『根来寺坊院跡』（財）和歌山県文化財センター編集・和歌山県教育委員会発行 1994 年 巻頭 9

「根来寺坊院近景（南上空より）」『根来寺坊院跡—発掘調査 10 年の歩み—』和歌山県教育委員会発行 1991 年 巻頭図版 1

「城郭を思わせる石垣」『根来寺坊院跡—発掘調査 10 年の歩み—』和歌山県教育委員会発行 1991 年 巻頭図版 2

「半地下式倉庫」『根来寺坊院跡—発掘調査 10 年の歩み—』和歌山県教育委員会発行 1991 年 巻頭図版 2

第 36 回企画展『備前の徳利、海の道をゆく』展示パネル作成・企画展パンフレット掲載のため 備前市歴史民俗資料館
20.08.08 付依頼

「鹿角製品」集合写真『西庄遺跡—都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』2003 年 巻頭図版三

『動物とのかかわり—先史時代の動物利用—』平成 20 年度企画展冊子に掲載のため 下関市立考古博物館 20.08.20 付依頼

「根来寺山内を東から望む」写真『根来寺坊院跡 広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1994 年 巻頭 2

「谷部 B 地区」写真『根来寺坊院跡 広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1994 年 巻頭 4

「1. 第Ⅳ区 調査地全景と堀跡の地形（東南東上空から）」写真『根来寺坊院跡 県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来
工区発掘調査報告書』1997 年 巻頭図版 3

平成 20 年歴史館いずみさの特別展『日根荘と根来寺—戦国を生きる人びと—』写真パネル展示のため 泉佐野市立歴史
館いずみさの 20.09.21 付依頼

「中世墓出土の人骨」写真『西庄遺跡—都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』2003 年 350P

考古学企画記事「日本人のカルテ」の記事に添付のため 社団法人 共同通信社 大阪支社社会部 20.10.16 付依頼

「有田川町野田地区遺跡遺跡出土 からすき 2 点」

「みなべ町徳蔵地区遺跡 牛の足跡の写真 5 枚」

平成 20 年度新春企画展『ウシの歩み』に展示のため 和歌山県立紀伊風土記の丘 20.12.17 付依頼

「高田土居城跡全景」写真『高田土居城跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡—県道上富田南部線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』
2006 年 図版 1

『熊野水軍のさと』高橋 修編に掲載のため 清文堂出版株式会社 20.12.27 付依頼

「N 地区（N03-K 土生池 3 号窯）」写真『藤並地区遺跡発掘調査報告書—一般国道 42 号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査—』
1995 年 巻頭図版 4

「竪穴建物 1 土器廃棄状況」『旧吉備中学校校庭遺跡—有田川町公共下水処理施設建設に伴う発掘調査報告 1—』（財）和歌山県
文化財センター調査部分執筆・有田川町遺跡調査会発行 2008 年 巻頭図版 3

「有田川町文化財マップ」掲載のため 有田川町教育委員会 21.01.30 付依頼

旧吉備中学校校庭遺跡第 1 次調査・第 2 次調査写真アルバム一式 2005・2006 年度調査記録写真

有田川町教育委員会企画の展示資料を作成するため 有田川町教育委員会 21.03.05 付依頼

V 刊行図書・出版物等

〔埋蔵文化財課関係〕

調査報告書等

『財団法人 和歌山県文化財センター年報 2007』 20.05.19 発行

『県指定史跡水軒堤防確認調査報告書』和歌山県教育委員会発行（当センター調査部分執筆） 21.03.31 発行

現地説明会資料

「2008 年度京奈和自動車道遺跡発掘調査 中飯降遺跡の調査」現地説明会資料	20.07.26 発行
「田辺城下町遺跡の発掘調査」現地説明会資料	20.08.13 発行
「県指定史跡水軒堤防 現地説明会資料」	20.10.11 発行
「平成 20 年度京奈和自動車道遺跡発掘調査 中飯降遺跡の発掘調査」現地公開資料	21.01.11 発行
「平成 20 年度京奈和自動車道遺跡発掘調査 西飯降Ⅱ遺跡の調査」現地説明会資料	21.02.07 発行
「県指定史跡水軒堤防 現地公開資料」	21.02.14 発行
「北山廃寺、北山三嶋遺跡の調査」現地説明会資料	21.02.21 発行

報告会・シンポジウム資料

「紀州の歩み」第 18 回 (財)和歌山県文化財センター速報展 リーフレット	20.05.12 発行
『第 3 回地宝のひびき 一和歌山県内文化財調査報告会一』(冊子)	20.07.20 発行
『公開シンポジウム 岩陰と古墳一海辺に葬られた人々一』(冊子)	20.10.04 発行
『公開シンポジウム 縄文時代の実像に迫る一大型竪穴住居の発見によせて一』資料	20.10.19 発行
『京奈和自動車道関連遺跡調査報告会』資料	21.03.21 発行

埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌 (財)和歌山県文化財センター通信『風車』

第 43 号	20.07.01	特集 新誌面になりました!、有田郡有田川町藤並地区遺跡の発掘調査、速報展示「紀州の歩み」
第 44 号	20.09.05	特集 京奈和自動車道遺跡発掘調査「中飯降遺跡の調査」
第 45 号	20.12.15	特集 重要文化財金剛三昧院保存修理工事「客殿及び台所について」
第 46 号	21.03.15	特集 京奈和自動車道関連遺跡発掘調査「西飯降Ⅱ遺跡の調査」「重行遺跡の調査」

VI 普及事業

協賛事業

関西考古学の日	20.10.11	各発掘調査現場・各イベントで協賛
関西考古学の日 スタンプラリー	20.09.03~20.11.30	かつらぎ町中飯降・西飯降

報告会・シンポジウム

第 3 回地宝のひびき 和歌山県内文化財調査報告会 記念講演「土偶が語る紀伊の縄文文化」 大野 薫 (財団法人大阪府文化財センター)	20.07.20	於:和歌山県立図書館 (きのくに志学館)	参加者 67 名
公開シンポジウム 岩陰と古墳一海辺に葬られた人々一 基調講演「古墳時代の他界観」 和田晴吾 (立命館大学)	20.10.04	於:和歌山県立情報交流センター BIG・U	参加者 81 名
かつらぎ町中飯降遺跡 公開シンポジウム 縄文時代の実像に迫る 一大型竪穴住居の発見によせて一 記念講演「縄文社会の複雑化」 泉 拓良 (京都大学)	20.10.19	於:かつらぎ総合文化会館	参加者 69 名
京奈和自動車道関連遺跡調査報告会 中飯降遺跡・西飯降Ⅱ遺跡の調査	21.03.21	於:かつらぎ総合文化会館	参加者 61 名

紀の国歴史探訪

第 7 回 歩いて知る紀の国歴史探訪 ～根来寺～(村田・手島・多井)	20.10.25	参加者 24 名
------------------------------------	----------	----------

[埋蔵文化財課関係]

発掘調査現地見学会・説明会

京奈和自動車道(紀北東道路)関連遺跡発掘調査

・中飯降遺跡	現地説明会	20.07.26	参加者 220 名
	現地見学	20.08.23	文化財研究会 参加者 34 名
	現地見学	20.10.27	かつらぎ町立天野・新城・梁瀬・四邑小学校 5・6 年生
	現地一般公開	21.01.11	参加者 120 名
・西飯降Ⅱ遺跡	現地説明会	21.02.07	参加者 256 名
田辺城下町遺跡	現地説明会	20.08.13	参加者 18 名
県指定史跡水軒堤防	現地説明会	20.10.11	参加者 120 名
	現地公開	20.02.14	参加者 18 名
北山廃寺・北山三嶋遺跡	現地説明会	21.02.21	参加者 101 名

速報展・企画展

「紀州の歩み」第 18 回(財)和歌山県文化財センター速報展	於:きのくに歴史探訪館	20.05.12~06.30	見学者 60 名
2007『紀州の歩み』総括報告「2007「紀州の歩み」 総括報告 平成 19 年度の調査から一回顧 2007 考古学調査―」			
	きのくに歴史探訪館	20.05.17	参加者 10 名
「鹿の描かれた時代～紀ノ川流域の弥生時代～」平成 20 年度冬季企画展『紀ノ川の考古学・民俗学』			
	於:和歌山県立紀伊風土記の丘	21.01.24~03.15	
京奈和自動車道関連遺跡調査報告会関連遺物展示	於:かつらぎ総合文化会館	21.03.03~03.21	

考古学出前授業

- 「発掘調査からわかる 川永の歴史と祖先の暮らし」(村田・田中) 和歌山市立川永小学校 6 年生 20.06.03
- 「発掘調査からわかる 歴史と祖先の暮らし」京奈和自動車道(紀北東道路)遺跡第 3 次発掘調査 中飯降遺跡調査事務所(村田) 学校法人きのくに子どもの村学園 中学校講座 20.09.18 16 名

[文化財建造物課関係]

現地見学会

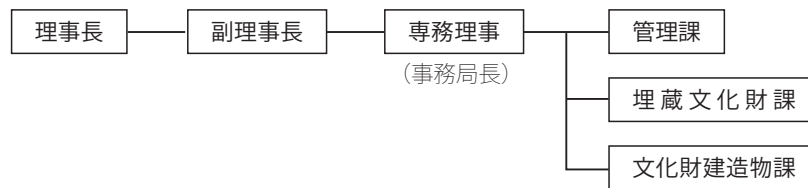
- ・重要文化財 旧中筋家住宅
 - 現地見学会 紀の国ふれあいバス 20.05.15
 - 現地見学会 禰宜自治会 20.06.15
 - 現地見学会 野外地理学研究会 20.11.30
- ・重要文化財 徳川家霊台
 - 現地見学会 高野山小学校 3・4 学年春季遠足 20.05.22
- ・県指定文化財 十禅律院
 - 現地見学会 『見て知る 伝統技術』 21.02.07

建造物出前授業

- 「ふるさと教育(和歌浦探訪)」(鳴海) 和歌山県立星林高等学校国際交流学科 1 年生現地体験学習 20.11.12

VIII 和歌山県文化財センター組織

組織図



役員(理事)

理事長	小 関 洋 治	前 和歌山県教育委員会 教育長
副理事長	鈴 木 嘉 吉	元 奈良国立文化財研究所長
副理事長	山 口 裕 市	和歌山県教育委員会 教育長
理 事	岩 橋 驍	前 財団法人 和歌山県文化財センター 専務理事
理 事	工 楽 善 通	大阪府立狭山池博物館長
理 事	櫻 井 敏 雄	元 近畿大学 教授
理 事	西 川 秀 紀	宗教法人 東照宮 代表役員
理 事	林 宏	社団法人 和歌山県文化財研究会長
理 事	前 田 孝 道	宗教法人 護国院(紀三井寺) 代表役員
理 事	松 田 長次郎	元 和歌山県教育委員会 参事
理 事	森 郁 夫	帝塚山大学 教授

役員(監事)

監 事	風 神 正 典	税理士・風神会計事務所 代表取締役
監 事	宮 下 和 己	和歌山県教育庁生涯学習局長

評議員

井 藤 徹	日本民家集落博物館長
小 野 成 寛	宗教法人 道成寺 代表役員
加 藤 容 子	元 和歌山県教育委員会 教育委員
神 吉 紀世子	京都大学大学院 准教授
木 下 淳	和歌山県教育庁生涯学習局 文化遺産課長
佐々木 公 平	宗教法人 広八幡神社 代表役員
立 花 秀 浩	元 和歌山県立文書館長
千 森 督 子	和歌山信愛女子短期大学 准教授
黒 田 吉 廣	和歌山県教育庁総務局 総務課長
額 田 誠 規	和歌山県立博物館 副館長、館長職務代理者
水 田 義 一	和歌山大学 教授
和 田 晴 吾	立命館大学 教授
和 田 正	和歌山県立紀伊風土記の丘 副館長、館長職務代理者

(平成 20 年 6 月 16 日付)

職員

▷事務局長 酒 部 三 依

▷管 理 課

主 査 松 尾 克 人

副 主 査 出 口 由香子

▷埋蔵文化財課

課 長 村 田 弘

専 門 員 富加見 泰 彦

課長補佐 井 石 好 裕

主 任 土 井 孝 之

主 任 佐 伯 和 也

主 任 内 田 好 昭 (派遣元：財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

主 任 尾 藤 徳 行 (派遣元：財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

主 任 原 田 昌 則 (派遣元：財団法人八尾市文化財調査研究会)

主 査 樋 口 薫 (派遣元：財団法人八尾市文化財調査研究会)

副 主 査 佐々木 宏 治

技 師 岩 井 顕 彦

技 師 富 永 里 菜

技 師 田 中 元 浩

技 師 川 崎 雅 史

技 師 手 島 芙実子

専門調査員 菅 原 正 明

▷文化財建造物課

課 長 鳴 海 祥 博

主 査 多 井 忠 嗣

参 与 山 本 新 平

技 師 御 船 達 雄

技 師 下 津 健太郎

技 師 結 城 啓 司

技術補佐員 増 野 真 衣

技術補佐員 田 村 収 子

技術補佐員 中 西 順 三

(平成 20 年 10 月 1 日付)

掲載図案 表紙右上：田辺城下町遺跡(2008 年度調査)出土 呪文を書いた皿
表紙左下：金剛三昧院客殿及び台所 修理前 正面図
裏 表 紙：中飯降遺跡(2008 年度調査)出土 縄文土器

財団法人
和歌山県文化財センター年報
2008

2009 年 5 月 20 日

■編集・発行

財団法人 和歌山県文化財センター

〒 640-8404 和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

URL : <http://www.wabunse.or.jp/>

E-mail : maizou-1@wabunse.or.jp

■印刷 株式会社 協 和



(財)和歌山県文化財センター
<http://www.wabunse.or.jp>